

浅川扇状地遺跡群

ひらばやしひがしおき
平林東沖遺跡(2)

(仮称) Family Mart 長野平林店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014年12月

長野市教育委員会



調査区周辺航空写真



調査区 航空写真



SK1土坑墓（平安時代）



住居跡（古墳時代）出土土器

序

埋蔵文化財は、「土地に刻まれた歴史」といわれ、遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、当時の人々の生活を今に伝え、郷土の成り立ちと文化を理解するうえで重要な役割を持っています。

善光寺平に位置する長野市には数多くの遺跡が周知されていますが、この中で、開発事業により保存が困難であるものについては事前に発掘調査を行い、記録保存という形で後世に残していく手段がとられています。


ここに長野市の埋蔵文化財第138集として刊行いたします本書は、長野市の東方に位置する古牧地区にて行われた発掘調査の成果をまとめたものです。発掘調査では古墳時代から平安時代の遺構・遺物を確認しました。この成果が地域の歴史解明、または文化財保護の一助として広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対し深いご理解とご協力を賜りました関係各位、また発掘調査に際してご協力をいただきました地元の皆様に御礼申し上げます。

平成26年12月

長野市教育委員会
教育長 堀内 征治

例 言

- 1 本書は、民間開発事業である店舗新築工事に伴い、記録保存を目的として平成25年度に発掘作業を実施し、平成26年度に整理作業を実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査の実施については、事業主体者である中信建設株式会社代表取締役社長諏訪和孝及び有限会社ちの設計代表取締役茅野茅九六からの委託により、長野市長加藤久雄が受託し、長野市教育委員会（担当：埋蔵文化財センター）が直営事業として実施した。
- 3 調査地は長野市平林1丁目1038番2に位置する。
- 4 発掘調査は、平成25年8月26日から10月25日にかけて実施し、実質調査面積は960㎡である。
- 5 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（日本測地系2000）と日本水準原点の標高を基準とし、株式会社写真測図研究所の開発した遺跡調査支援システム「ATS」のうち、光波測距儀を用いた「コーディック・システム」を採用するため同所に委託した。
- 6 遺構図は、全体図を1：200、遺構個別図を1：80縮尺に統一してあるが、微細図その他については適宜縮尺を示した。
- 7 土器は、接合後全体および部位で1/2以上あるものを選別し実測を行い、図版を作成した。
 - ・遺物実測図は、土器が1：4、石器が1：3、鉄製品が1：2。この他微細図については適宜縮尺を示した。
 - ・土器実測図は、断面白ぬきが土師器、黒ぬりが須恵器を、トーンが灰軸を示す。
アミカケは  が黒色処理を示す。
- 8 調査によって得られた出土遺物および諸記録は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターにて保管している。なお、遺跡の略記号は「AHB-HOD区」である。

目 次

序

例 言

I 調査経過	1 調査概要
1 調査に至る経過	2 遺構と出土土器
2 調査の経過	3 その他遺物
3 調査体制	IV 平林東沖遺跡出土骨鑑定および金属遺物保存処理
II 周辺の遺跡と環境	V 平林東沖遺跡の考察
1 遺跡の環境	1 遺構の展開
2 周辺の遺跡	2 住居跡出土古墳時代後期土器について
3 平林東沖遺跡の既往調査	VI まとめ
III 調査の成果	

挿 図 目 次

図1 調査地位置図	図18 流路断面図
図2 調査区位置図	図19 SK1出土土器実測図
図3 周辺遺跡位置図	図20 SK1実測図
図4 既往調査区位置図	図21 SK14実測図
図5 調査区全体図	図22 SK14出土土器実測図
図6 調査区北側流路下古墳時代遺構位置図	図23 SK15実測図
図7 調査区南側遺構図	図24 SK15出土土器実測図
図8 SB1実測図	図25 SK2~4、6~9実測図
図9 SB1出土土器実測図	図26 SK19実測図
図10 SB2実測図	図27 その他遺構等出土土器(古墳時代)実測図
図11 SB2出土土器実測図	図28 その他遺構等出土土器(奈良・平安時代)実測図
図12 SB3実測図	図29 石製品実測図
図13 SB3土器・炭化物出土状況図	図30 鉄製品実測図
図14 SB3出土土器実測図	図31 調査区(A~D区)全体図
図15 SB3出土土器実測図	図32 古墳時代住居出土土器
図16 SB4実測図	
図17 SB4出土土器実測図	

表 目 次

表1 遺構表	表3 その他遺物観察表
表2 土器観察表	

I 調査経過

1 調査に至る経過

平林地区は、旧長野市街地の東方に位置する。国道406号線（平林街道）が東西にはしり、これと直交して高田若槻線が開通し交通の便がさらに良くなるなど近年開発が進む地域である。今回、高田若槻線に面する葛友印刷株式会社の敷地内（現駐車場）にて店舗（ファミリーマート長野平林店）建設が計画された。建設地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「平林東沖遺跡」の範囲内である。

このため、中信建設株式会社より6月13日に試掘依頼書を受け、同20日に試掘調査を行った。この結果、建設予定地内での埋蔵文化財の包含が確認され、工事着手前に記録保存を目的とした発掘調査を実施する必要がある旨を調査依頼者である中信建設株式会社へ伝えた。これを受け、8月1日付で発掘調査依頼書を受領、同7日付で（株）ファミリーマート多摩甲信地区開発3課福岡利浩氏より文化財保護法による届出を受け、8月9日付で文化財保護法による発掘調査の指示を通知した。

8月26日より発掘調査に着手し、10月25日に現場での発掘作業を終了した。なお、整理作業は平成26年度に行い、同12月に本書の刊行に至る。



調査区周辺航空写真



図1 調査地位置図 (S=1:10,000)

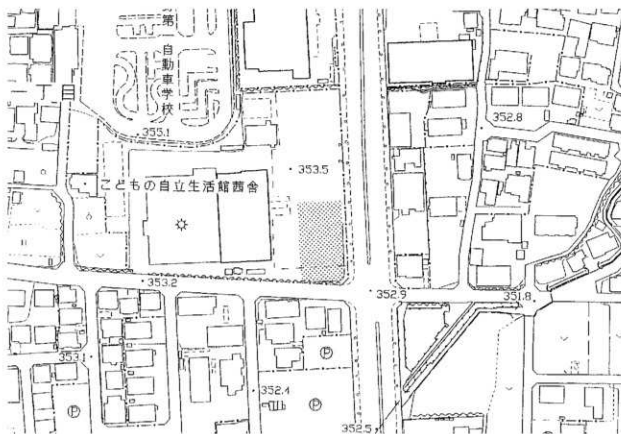


図2 調査区位置図 (S=1:2,000)



調査地周辺航空写真（平成2年6月撮影（株）ジャステック）



調査地周辺航空写真（平成25年10月撮影）

2 調査の経過

- 8月27日～ 重機による表土除去作業
- 9月9日 作業員参加による調査開始。排水作業、調査区北側より検出作業。
- 9月10日 SK1人骨・土器を検出。
- 9月11日 井戸をはじめ、調査区北側の遺構の掘り下げ開始。
- 9月13日 調査区南側、検出作業。
- 9月17日 先日までの雨により、調査区水没。
- 9月25日 調査区北側、井戸を中心とした上面の遺構全景・個別写真撮影。
- 9月26日 測量(1回目)。調査区南側遺構掘り下げ。SK1人骨検出開始。
- 9月27日 調査区北側、井戸周辺の下、遺構確認のためトレンチを設定。
- 10月1日 SB1・3掘り下げ。
- 10月1日 SK1写真・図面。調査区北側グリッドを設定し、遺構検出。
- 10月4日 調査区北側下面、住居(SB2・4)、溝等掘り下げ。
- 10月9日 SB2カマド写真・図面。SB3床面検出、全体に水がつく状態。
- 10月10日 SK1人骨取り上げ(バリノ・サーヴェイ) SB3床面、土器・炭化材検出。
- 10月11日 全景写真撮影。
- 10月15日 SB2カマド写真撮影。SB4掘り下げ。
- 10月16日 雨により、調査区全体が水没、排水作業。SB3遺物図面、取り上げ。
- 10月17日 SB3・4床面、床面土器検出。
- 10月18日 SB1・3写真撮影。この他、雨で埋まった遺構の掘り出し。測量(2回目)。
- 10月21日 図面結線。昨日の雨により水没、排水作業。
- 10月22日 調査区全体清掃。空撮。作業員、作業終了。
- 10月25日 流路トレンチ写真・図面。土器取り上げ、片付け。現場におけるすべての作業を終了。



表土除去(北西から)



調査区北側(上面)(北から)



調査区北側(下面)(北から)



調査区南側(南東から)

3 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直営事業として長野市埋蔵文化財センターが実施し、その組織は以下のとおりである。なお、発掘調査に使用する大型重機等の機材については、事業者（調査依頼者）から提供を受けた。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	堀内征治		
調査機関	文化財課	課長	青木和明		
	埋蔵文化財センター	所長	小山敏夫		
	庶務担当	係長	河口英明（～H25）		竹下今朝光（H26～）
		事務職員	大竹千春		
	調査担当	係長	飯島哲也（調査員）		
			風間栄一（H26～）		
		主査	小林和子		
		主事	塚原秀之（～H25）		
		専門員	柳生俊樹		高田亜紀子
			平林大樹（～H25）（調査員）		田中暁徳
			遠藤恵実子（調査員）		日下恵一
			篠井ちひろ		清水竜太（H26～）

発掘作業員 芦沢圭子 植木義則 江守重七郎 小俣明日香 久保田温子 小嶋恵美 酒井雅代
地子順子 曾根美奈子 高松貴美 田中和也 塚田美保 月岡純一 宮島恵子
村田岳仁 矢島優子 吉池佳織 蓬田真弓

整理調査員 青木善子 鳥羽徳子 武藤信子

整理作業員 清水さゆり 関崎文子 西尾千枝 待井かおる 三好明子

遺構測量委託 株式会社写真測図研究所 代表取締役 杉本咲子

自然科学分析および保存処理委託

パリオ・サーヴェイ株式会社 代表取締役 遠藤和郎



発掘調査参加者

Ⅱ 周辺の遺跡と環境

1 遺跡の環境

・浅川扇状地遺跡群と裾花川扇状地遺跡群

平林東沖遺跡が位置する浅川扇状地は、浅川東条を扇頂に南で裾花川扇状地に接し、東で千曲川の氾濫原の後背湿地に接する。長野市北西部に位置する飯縄山(1,197m)を水源とする浅川が、山間部を侵食しながら盆地に流入し形成された、東西方向を主軸にするなだらかな傾斜(25/1,000)の典型的な扇状地である。

この浅川扇状地に位置する浅川扇状地遺跡群では、旧石器時代の遺構は確認されておらず、遺跡が確認されるのは縄文時代からである。本格的な集落が形成されはじめたのは弥生時代からで、中期・後期の集落が多くみられ、以後古墳時代中・後期をピークに古代にかけ連続して集落を中心とした遺跡が営まれている。

このなかで平林東沖遺跡は、遺跡の多く存在する場所からは南に離れた所に位置する。遺跡が多い範囲(標高360~380m)では扇状地特有の地形であるのに対して標高350m付近では等高線が変化する場所であることがうかがわれる。この場所は浅川扇状地と南側に隣接する裾花川扇状地に近い位置である。

裾花川扇状地遺跡群が位置する裾花川扇状地は、旭山の里島付近を扇頂に東から南の方向に向かい、扇端は南東で犀川扇状地に、東部では千曲川氾濫原に接する。善光寺下から平林・北尾張部のラインで北側にある浅川扇状地と裾合谷となる。よって、平林地区はこの裾合谷に近い場所に位置しており、もともと遺跡が展開しづらい場所として考えられていた。

・平林地区周辺の地形

平林地区は、遺跡が展開する場所として、浅川扇状地遺跡群の中では異なった環境であるが、平林地区周辺について『長野県史』では、「三輪、平林、西和田、東和田、桐原、中越などの一帯に条里耕地があり広範囲にわたり、鐘鈴川の灌漑地帯とはほぼ一致する。平林の集落はもとより平林城跡も条里線の上に位置する。」とあり、さらに「平林から高田にかけては、条里プランが同一のものであった可能性が高く…」と述べられている。また、平林地区の南側、裾花扇状地内に位置する上高田(南向塚古墳周辺)の元水田地にて行われたプラント・オパール分析では、平安時代以前での稲作が行われていた可能性が示されている。

以上のことをふまえると、遺跡の位置する平林地区周辺においては、条里が広く存在していた可能性が高く、特に古墳時代以降、平安時代にかけての時期では、遺跡の展開について考慮されるところである。

<参考・引用文献> 長野県史刊行会 1989 『長野県史』 通年編原始古代1

長野市誌編纂委員会 1997 『長野市誌』 第1巻自然編

福島正樹 2002 「古代における善光寺平の開発について」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第96集

2 周辺の遺跡

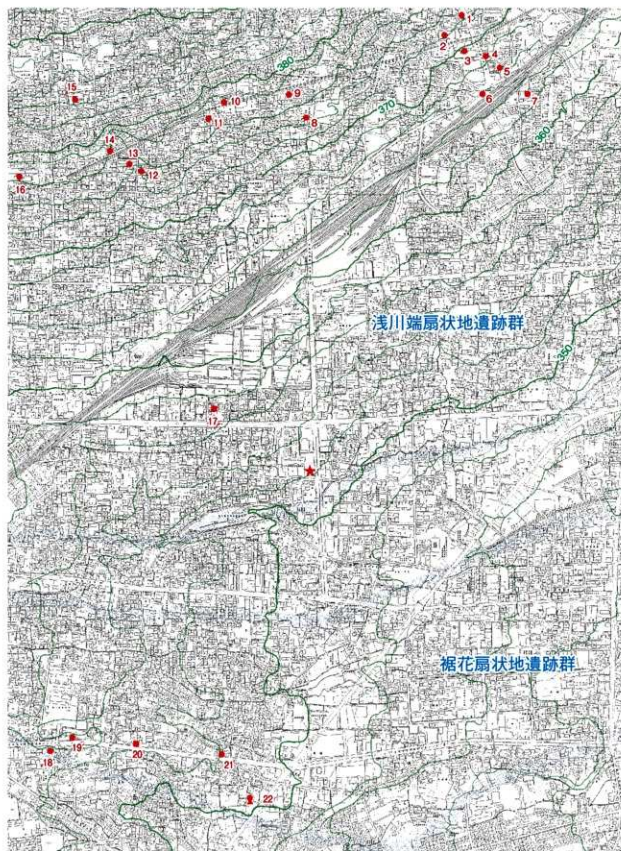
平林東沖遺跡は、浅川扇状地遺跡群と裾花川扇状地遺跡群との間にあることから、両遺跡群の内、本遺跡から南北側に近い遺跡の発掘調査の位置と概要を示した。

<浅川扇状地遺跡群>

- 1 吉田町東遺跡 北長野通り・北長野（停）中俣線地点：弥生時代中期から平安時代の住居が検出され、集落は古墳時代前期に一旦途絶え、その後古墳時代後期から平安時代まで続いていく様子がみられる。
- 2 吉田古屋敷遺跡 北長野駅前A-2地区地再開発事業地点：集落の時期は上記の吉田町東遺跡と同じであるが、特に古墳時代中期から後期の住居が多く検出され、翡翠製の垂飾が出土している。
- 3 吉田古屋敷遺跡 北長野駅前B-1地区市街地再開発事業地点：縄文時代後期の敷石住居、集石土坑が確認された。この他、弥生中・後期、古墳時代後期から平安時代の住居がみられ、奈良時代の住居からは、銅製丸軋が出土している。
- 4 吉田古屋敷遺跡 ポレスターステーションシティ北長野建設地点：弥生時代中期の住居址と土器を組み合わせて埋納した土坑、平安時代の合口甕棺墓と土坑墓が検出されている。
- 5 吉田古屋敷遺跡 J R吉田町東踏切除去（市道吉田朝陽線）事業地点：縄文時代中期住居、後期の柄鏡式とみられる敷石住居、弥生時代は中・後期の住居と後期の木棺墓・土器棺墓。住居は古墳時代以降みられない。
- 7 吉田四ッ屋遺跡 グランドハイッツ北長野開発事業地点：弥生時代中期・後期、古墳時代前期、平安時代の住居跡のほか、ガラス小玉・管玉を持つ弥生時代後期の土器棺墓、古墳時代前期の周溝を伴う墳丘墓が2基。
- 9 桐原宮北遺跡 桐原牧の里住宅地造成工事地点：弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代の住居。溝状の遺構からは、圈足円面硯（脚部片）が出土している。
- 10 桐原宮西遺跡 ガーデンパーク桐原住宅地造成事業地点：古墳時代後期・平安時代の住居跡が検出された。
- 11 返目遺跡 三輪二丁目宅地造成地点：周溝墓の可能性のある古墳時代前期の溝と、他平安時代にかけての溝。
- 12 三輪遺跡 国鉄本郷団地地点：弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代の住居。他遺構は中世までみられる。
- 13 三輪遺跡 県職員宿舎地点：平安時代の住居のほか、中世の五輪塔を埋納した遺構が検出された。
- 14 三輪遺跡 長電本郷住宅地地点：古墳時代後期から平安時代にかけての住居が検出された。
- 15 長野女子高校校庭遺跡 長野女子高等学校校舎改築工事地点：弥生時代後期、古墳時代中・後期の合わせて45軒の住居が検出された。遺物では、北陸系土器と265点を超えるガラス小玉が特筆される。
- 16 三輪遺跡 三輪小学校地点：弥生時代後期、古墳時代中期・後期、平安時代の住居が検出され、この内古墳時代後期の1軒は、大型で床面からは、多量の炭化材が出土している。

<裾花川扇状地遺跡群>

- 18 西方遺跡 上高田第一土地区画整理事業地点：古墳時代前期、古墳時代後期・奈良、平安時代の住居が検出されている。平安時代では小規模集落が想定され、灰軸・緑軸陶器が出土している。
- 19 西方遺跡 県道インター線地点：住居は古墳時代前期と平安時代のものがあり、古墳時代前期の住居では床面から大量の土器が出土している。この他、古墳時代後期末から奈良時代の溝が検出されている。
- 21 寺村遺跡 民間事業所建設地点：平安時代の住居が検出され、10世紀中頃から11世紀前半まで連続する集落と考えられる。



- 1：吉田町東遺跡 2～6：吉田古屋敷遺跡 7：四ッ屋遺跡 8：桐原居館跡 9：桐原宮北遺跡 10：桐原宮西遺跡
 11：返日遺跡 12～14、16：三輪遺跡 15：長野女子高校校庭遺跡 17：平林城館跡 18、19：西方遺跡 20：中沢城館跡
 21：寺村遺跡 22：南向塚古墳 星：平林東沖遺跡

図3 周辺遺跡位置図 (S=1:15,000)

3 平林東沖遺跡の既往調査

平林東沖遺跡では、平成25年度調査のほか、平成13・14・15年度に調査を行っている。この調査は、古牧中部土地区画整理事業に伴うもので、現高田若槻線道路とこれに伴う社屋移転地が調査区となっている。

平成13年度調査区（A区）は、中でも遺構が多く検出されている。竪穴住居は20軒中13軒がA区に位置している。住居のほとんどが古墳中・後期のものであり、このうち後期の住居では、カマド内とその周辺に土器が置かれ、カマド・壁際に炭化材が置かれている。掘立柱建物は隣接した位置に2棟あり、平安時代のもつみられる。土坑墓は大人と子供のものが各1基あり、子供のものでは鹿角を加工したものが副葬されている。また、ウシの下顎の骨を2つに割って入れた土坑など、特異な遺構がみられる。

遺物では、墨書土器や転用硯などの文字に関係するものや、土坑や検出面などの遺構外からの灰軸陶器や緑軸陶器の出土が特筆される。

平成14年度調査区（B区）は、調査区の南東側では遺構がみられなくなり、遺跡の端部であることが考えられる。竪穴住居は古墳時代中期・後期、平安時代の各1軒である。掘立柱建物も1棟あるが、A区のものとは比べ離れた位置にあり、時期も奈良・平安時代とするにとどまる。ここでは古墳時代前期の遺構がみられる。どちらも土坑内に土器が複数入れられたものであるが、1つは廃棄後の井戸、もうひとつは浅い土坑にほぼ完形の器台や小型埴が底面に接して置かれている。

平成15年度調査区（C区）では、竪穴住居はごく一部の検出も含め4軒と少ない。遺構は、細い溝や土坑・ピットがほとんどであるが、調査区北側と南側では、平面が広い掘り込みがみられ、底部に接して完形の坏や壺などが置かれている。また、検出面からはウマ・ウシ、ニホンジカ、ガンヤイスなどの獣骨が多くみられ、加工されたとみられるウシ骨のほか、ウシの肋骨を加工したト骨が土坑の覆土中から出土している。特に調査区東側については、古墳時代以降の居住域以外の場所であることが考えられる。

全調査区に共通する特徴として、井戸が多くつくられていることである。円形で径は1～2mのほか大きなもので3m前後ある。深さは0.6～1mが多く、深いもので1.7mとなる。いずれも素掘りで、底部に河原石が入れられたものがみられるほかは、手を加えた状況はみられない。河川の影響も含め、湧水点の高い水利のよい場所である。

井戸の時期は平安時代であり、この時期は平林地区の隣接地にて平安時代以前からの稲作の可能性が示されていることから、特にC区でみられるこの時期のウシ・ウマ、古骨や土器のある性格不明遺構などと、農耕との関連性がうかがわれる。

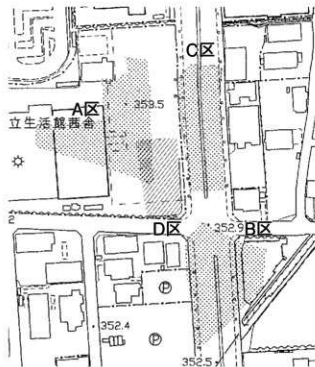


図4 既往調査区位置図（S=1:2,000）

Ⅲ 調査の成果

1 調査概要

本調査は、店舗および駐車場部分の内、調査区北西側で一部A区（H13年度調査区）と重複する部分を除いた範囲を行った。検出した遺構は、住居跡4軒、土坑墓1基、井戸7基、溝、土坑・ピットである。時期は古墳時代後期～平安時代である。

遺構検出時より調査区北東半ではレキが多くみられた。井戸（平安時代）はこのレキ層を掘り込んで造られたもので、井戸は北東側のレキ層と同じ場所で7基が近い位置にある。径180cm前後の円形の、深さ80cmほどの素掘のもので、1基で底に河原石があるほかは何も検出されなかった。

調査区壁面から、レキ層の下に遺構があることが確認されたため、井戸の完掘後、レキの範囲にグリッドを設定し、下面より古墳時代を中心とした住居と溝・土坑を検出した。住居の内2軒（SB2・4）はここからの検出であり、重複していたこともあり状況はよくはなかったが、2軒共カマドの検出ができた。調査区南側に位置するSB3は、検出面からの掘り込みが深く、カマドと周辺の土器・炭化材を検出した。住居はSB3がやや南側に離れるが、ほかは近い位置にあり、いずれも古墳時代後期のものである。

土坑墓は平安時代のもので、長さ2mの土坑内に、仰向けの人骨とともに、坏・刀子が副葬されていた。

調査区北側に古墳時代、南側に平安時代の遺構が集中している。調査区内に北側より流れ込んだ流路は、規模は大きくないが、これにより、古墳時代後期から平安時代のかけての土地利用の変化に影響を与えたことがうかがわれる。



調査区全景（空撮）

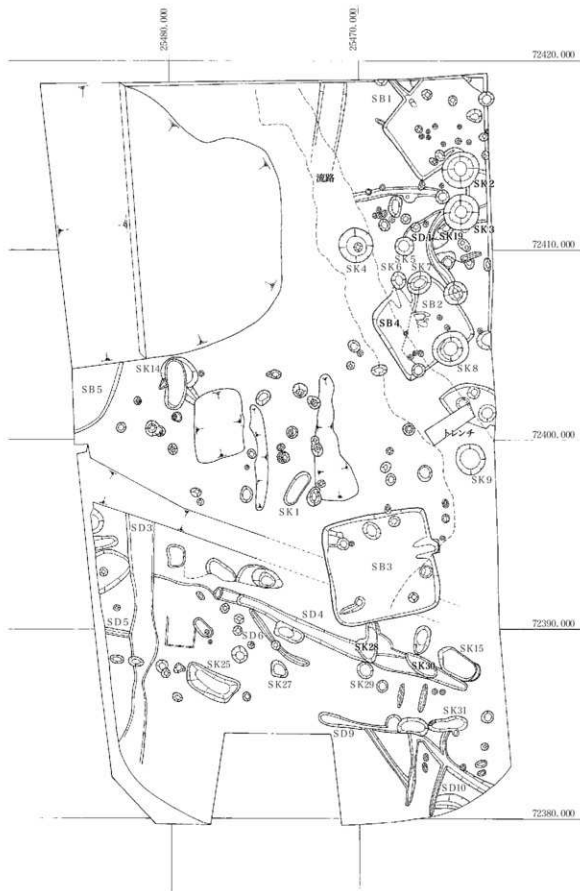


图5 調査区全体図 (S=1:200)

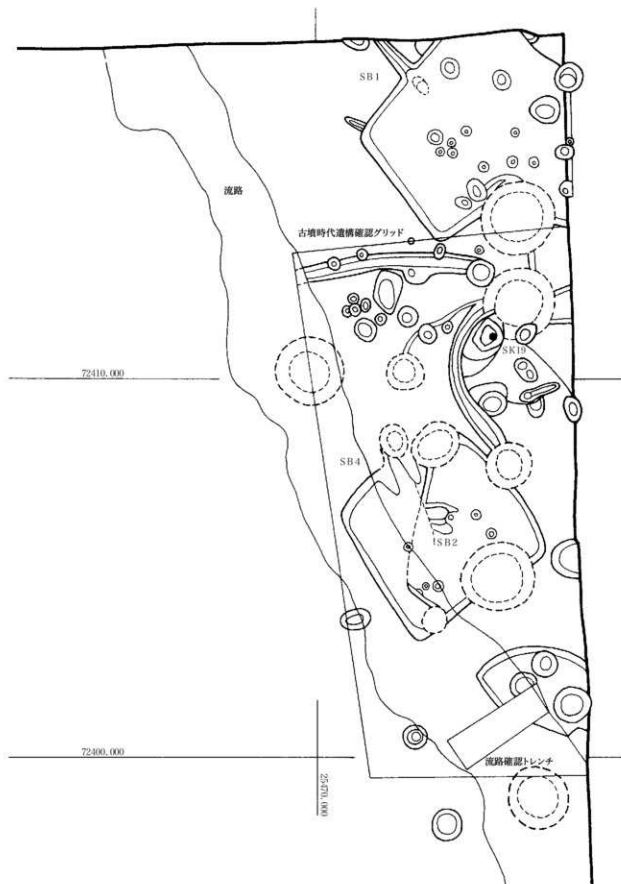


図6 調査区北側流路下古墳時代遺構位置図 (S=1:100)

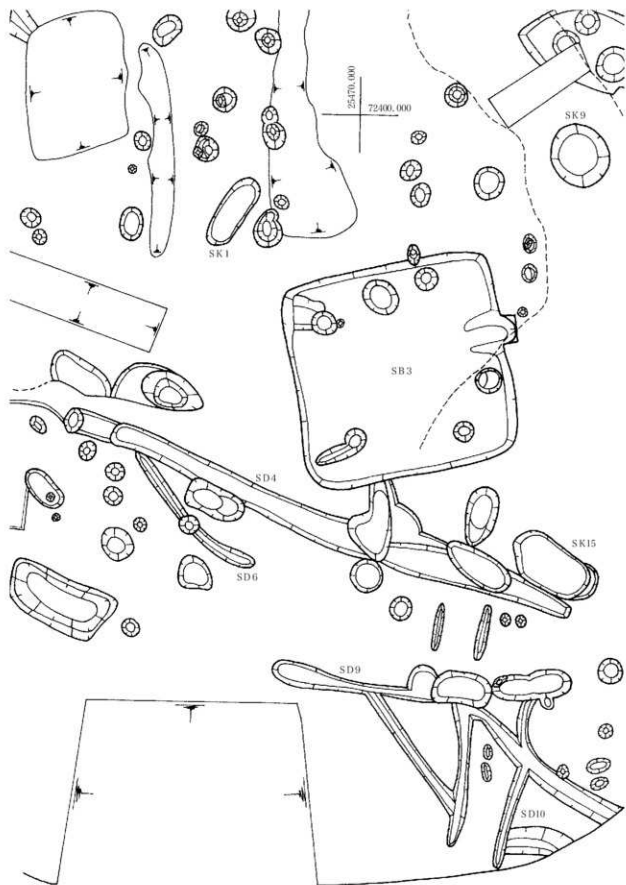


图7 调查区南侧构造图 (S=1:100)



調査区全景 井戸ほか（平安）検出（北から）



調査区全景 住居ほか（古墳）検出（北から）



古墳時代遺構（北側）（北から）



調査区南側（北西から）



調査区全景（南西から）



調査区全景（南東から）



調査区全景（南から）



調査区全景（南から）

表1 遺構表

遺構名	時期	遺 構			土 器		その他 遺 物	
		平面形 (規模m)	検出率	施設・主軸・重複ほか	個別 図版	出土量 (g)		実測数 図 版
SB1	古墳後期	方形 4.0×(5.2)	2/3	横道・カマド 主軸:北西	図-8	8,530	9 図-9	
SB2	古墳後期	方形 一×4.5	一部	カマド・床のみ,SB4に重複 流路下、主軸:西	図-10	12,230	13 図-11	鉄・獣骨・石
(SB2-4)				流路部掘り下げ SB2・4検出		3,825		
SB3	古墳後期	隅丸正方形 5.8×5.6	完	カマド・周辺土器、 床面炭化物 主軸:東	図 -12・13	19,700	27 図-14・15	石・獣骨
SB4	古墳後期	隅丸正方形 4.3×4.4	完	流路下,SB2が重複 主軸:北西、井戸重複	図-16	11,690	11 図-17	獣骨
SB5	古墳?	方形? —	一部			950		
SD1	古墳後期	幅:0.3~0.5	一部	円形に曲がる。流路下面 井戸(SK3・6)に切られる		360		
SD2	平安時代	幅:0.8	一部	SK15が重複、北西方向		320	1 図-28	
SD3	平安時代	幅:1.2~1.0	一部	南北方向(北側不明)		1,080		石
SD4	平安時代	幅:0.9~0.8	完?	東西方向		1,140		石
SD5	平安時代	幅:0.4	一部	東西方向		25		
SD7	平安時代	幅:0.2	完	南北方向		80		
SD8	平安時代	幅:0.3	完	南北方向		10		
SD9	平安時代	幅:0.6~0.4	2/3	東西方向、SD10と重複		160		
SD10	平安時代	幅:0.4	2/3	南北方向、SD9と重複		100		
SK1	平安時代	長方形 2.0×0.76	完	土坑墓 副葬品(坏・刀子)	図-20	145	1 図-19	刀子(図30)
SK2	平安時代	円形 径:2.0	完	井戸	図-25	1,550	1 図-27	
SK3	平安時代	円形 径:2.0	完	井戸	図-25	1,080	1 図-28	獣骨・石
(SK2-3遺構周辺)				流路下遺構検出		850		
SK4	平安時代	円形 径:1.7	完	井戸	図-25	315		獣骨
SK5	平安時代	円形	完			180	1 図-28	
SK6	平安時代	円形 径:1.2	完	井戸	図-25	450		
SK7	平安時代	円形 径:1.3	完	井戸	図-25	395		鉄片
SK8	平安時代	円形 径:1.9	完	井戸	図-25	1,110	1 図-28	
SK9	平安時代	円形 径:1.7	完	井戸 底部に石	図-25	930		
SK10		円形	完			150		
SK11	平安時代					145	1 図-27	
SK12	平安時代					420	1 図-28	

遺 構					土 器		その他 遺 物	
遺構名	時期	平面形 (規模m)	検出率	施設・主軸・重複ほか	個別 図版	出土量 (g)		実測数 図 版
SK13		円形	完			480		
SK14		楕円形 2.6×1.0	完	土器・獣骨(一部)	図-21	815	2 図-22	獣骨(ニホン ジカ)
SK15	平安時代	楕円形 2.4×1.2	完	土器・獣骨(一部)	図-23	1,040	1 図-24	獣骨(ウマ・ ウシ)
SK16		円形	完			160		
SK17	古墳後期	楕円形	完			85		
SK18		円形	完			20		
SK19		方形 0.7×0.75	完	柱穴 柱芯材(炭化)	図-26	60		
SK20		円形	完			135		
SK21		円形	完			675		
SK22		楕円形	1/2			430	1 図-27	
SK23		円形	1/2			50		
SK24		楕円形	完			45		
SK25	平安	長方形	完			740		
SK26						205		
SK27		円形				2		
SK28		楕円形	完			680		
SK29		円形	完	底部に石		635		
SK30	平安	長方形(不)	完	SD4に重複		160		
SK31		楕円形	完			200		
SK32		不整形	1/2			1,425	2 図-27	
炭化物周 辺グリッド				炭化面		845		
Pit1 ～Pit25		円形 古墳～平安				885	1 図-28	
壁面						1,225		
グリッド						12,130	12 図-27・28	砥石(図29- 1)石・鉄
トレンチ				古墳時代遺構確認 流路断面確認	図-6 図-18	2,885	4 図-27・28	鉄・骨
検出面						19,090	16 図-27・28	砥石(図29- 2)銭・骨・歯・ 鉄滓
南側 カクラン						530	2 図-27	

総量 113,552g

2 遺構と出土土器

・SB1

調査区の北東隅に位置する。北西側を向き、北壁のほぼ中央にカマドが位置する。遺構東側は調査区外に、南側は2/3以上が井戸跡（SK2）などに切られていることから、明確な遺構範囲は検出されなかった。平面形態は横（東西方向）にやや長い長方形とみられる。流路の東側に位置し、影響を受けていないことから検出時および覆土中からレキが混入する様子は見られず、良好な状況であった。

検出面から床面までの掘り込みは浅い。このためカマドは煙道とその入り口に焼土が、前面に硬化面と焼土面がみられるのみで構築材などもみられなかった。床面は、硬化面がカマドの周辺のみであるが、全体にしまりのある明瞭なものである。

床面からは土器が数点出土した。遺構中央やや南寄りに炭化材とその周辺に坏など形比較的形の残る土器がみられた。なお、出土土器は遺構の掘り込みが浅いため、覆土中からのものは少なく、床面に接していたものが出土遺物のほとんどを占めている。

遺構内に小型のピットが数基みられたが、柱穴とみられるものは検出されなかった。土器・炭化物の所に位置するSK1は、覆土中からの遺物の出土はほとんどみられず、SK2については、住居範囲外のものの可能性も考えられる。

出土土器は坏、高坏、甕、ミニチュア土器である。（図9）

甕以外は（3は磨耗により不明）、内黒処理がされる。

坏は底部から丸く立ち上がるもの（1・3）と底部があり器高のやや低いもの（2）があり、高坏（5）は坏の下位に横がみられる。甕（7・8）はハケ調整で、9は円形浮文のあるハケ調整の甕である。

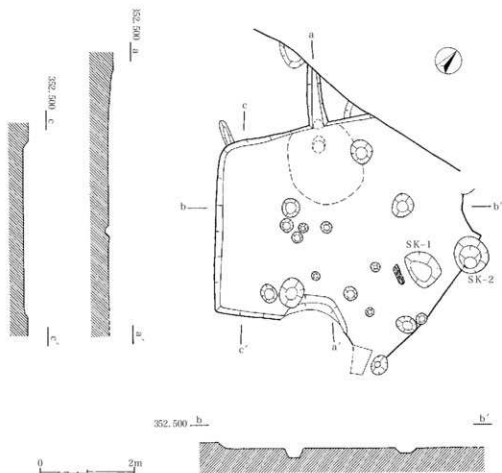
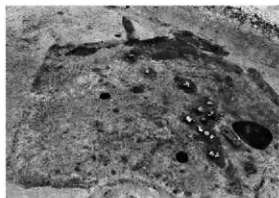


図8 SB1実測図（S=1:80）



SB1全景(土器出土)(南東から)



SB1全景(南東から)



SB1土器・炭化物出土状況(西から)



SB1カマド(南東から)

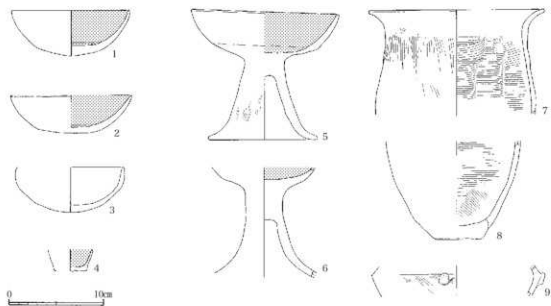


図9 SB1出土土器実測図(S=1:4)

・SB2

調査区の東北に位置する。上面は流路の影響を受けており、流路レキ層の上面を下げたからの検出となった。

SB4に重複している遺構であり、覆土中にもレキが多く混じることから2軒を平面から分けて検出することが困難であり、比較的検出ができていたSB4西側より掘り下げた。このためカマドの西側の一部を検出することができなかった。

カマド部の検出により、カマドを中心として床面の確認を行ったところ、覆土中上面のレキが取れた時点で床面となった。全体に、確認できた検出面からの掘り込みは浅いものであった。特にSK6・7・8・11とSDの一部が掘り込まれていること、SB4と重複していることにより住居の壁面を全体で確認することができなかったが、カマド周辺の一部から幅4.5m、床面の検出状況から東側は調査区外にのび、長さは4.5~5.0mほどと推測される。

カマドは天井部分まであり、上から押し潰された状態ではほぼ全体が残っていた。袖石や天井石などの石材はみられない粘土構築のもので、内部の幅は約60cm、その中央には支脚石が残る。内部および前面では焼土がみられるもの、特に内部での明確な硬化はみられなかった。支脚石は長さ15cmで上から半分までに火を受けた痕が残り、検出時は上部に坏と甕の底部が重ねて被せられていた。土器には火を受けた痕がみられないことから、使用後被せたものとみられる。カマドの上部には瓶、高坏、甕がめり込んだ状態であり、左側の袖にも土器片が入り込んでいた。このほかカマド左手の床面に甕があるほかは、カマド周辺での土器はみられなかったが、甕(図11-22)は遺構東端で検出したもので、床面に接していることから同遺構と判断した。

土器(図11)は、坏・高坏はいずれも内黒処理がされたもので、単孔の瓶と小型の甕(15、20)も内黒処理である。甕はハケ調整で、19は木葉痕がある。21・22は頭部が長く、丸い胴部のミガキ調整である。



SB2カマド検出状況(東から)

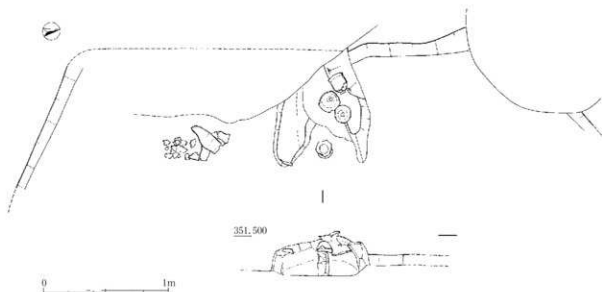


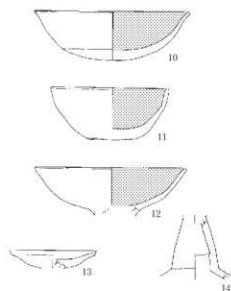
図10 SB2実測図(S=1:30)



SB2カマド土器出土状況 (東から)



SB2カマド (東から)



SB2検出状況 (東から)

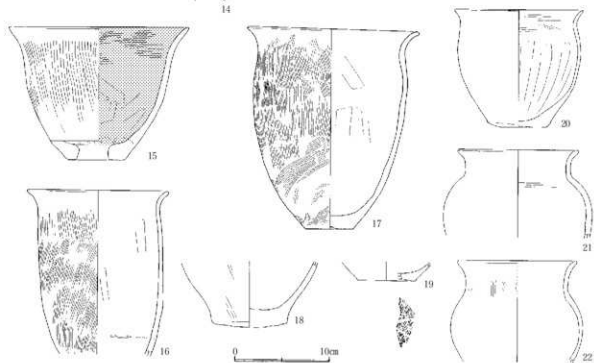


図11 SB2出土土器実測図 (S=1:4)

・SB3

調査区南半、住居跡の中では南端に位置する。遺構の平面形は5.8×5.6の正方形のほぼ正方形で軸は東西方向をむき、東側にカマドが造られており、北西方向をとるほかの住居とは様相を異にする。検出面では流路の影響を東側で受けているが、検出面からの掘り込みの深さがあるため、ほかの住居跡と違い流路による遺構への影響はみられなかった。

東西方向に排水溝が入っていたため、排水溝部分の覆土は取られた状態での掘り下げとなったが、遺構がそれよりも深かったことから床面への影響はほとんど見られなかった。排水溝のカクラン下面にあたる、覆土全体の1/3ほどの位置から土器片と炭化物が出はじめ、床面では形の残る土器・炭化物が確認された。

検出時点から全体的に水がつきはじめ、床面と特に住居内の土坑・ピットは常に水が湧いている状態であった。床面は明確な硬化面の広がりはみられなかったが、しまりがあり明瞭で、部分的に硬化している箇所がみられる。

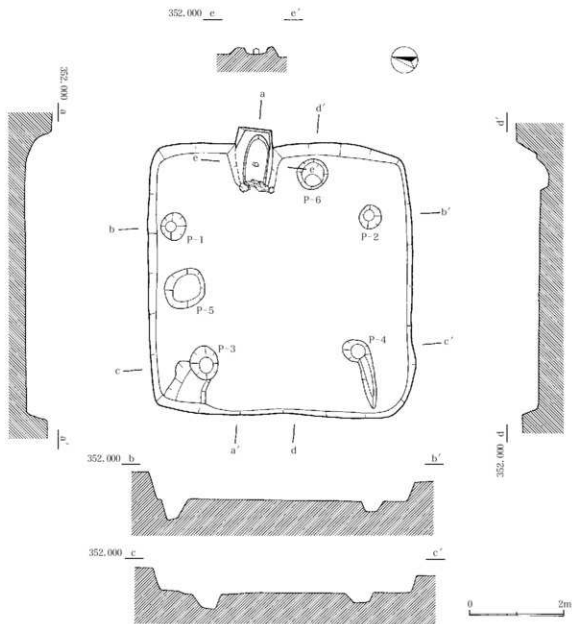


図12 SB3実測図 (S=1:80)

柱穴は、P-1～4が検出された。P-1については、ほかのものより壁面に寄った位置にあり明確ではない。P-5・6も遺構に伴うものであるが、いずれも上に床面の土器・炭化物があり、その下からの検出で、柱穴とみられるP-1も同じ検出状況であることから、炭化材・土器は、住居廃棄後のものであることが考えられる。

カマドは、東壁やや北寄りに位置する。検出時から周辺に土器が多くみられ、覆土中から袖土上にも乗っている状態であった。両側に袖石、前面に天井石が残り、内部は長胴甕を中心に土器が置かれ、この下からは中央に支脚石がある。煙道はみられず、カマドの壁面は、住居壁面より25cm外側に向かい立ち上がる。

住居内では、覆土下層（床面から10～15cm上）中から炭化物がみられ始め、床面では炭化材の形が残るものが見られる。これらは壁際に多く、特に北壁に集中しており、15～20cm大の川原石と土器と一緒に出土している。この様子は、住居南壁付近にも一部みられるが、カマド側（東壁）と北壁に沿って多くみられる。土器は、坏がカマド左側と北側の炭化物の所に多く、カマド右側には把手付きの甕と長胴甕が上下に合わせたような状態で検出されている。（図13）

土器の出土は今回の調査では一番多い。中でも坏が多く、小さな半球形の胴部に大きく外反する口縁部のもの（図14-23-30）と、これより胴部が大きく口縁が小さなもの（31）があり、いずれも内黒処理がされる。須恵器は蓋（32）のみであるが、TK47型式に併行する時期のものである。甕は長胴甕がひげ調整、胴部の丸い小型のものはミガキ調整である。43の表面には広く黒斑と粘土が付着した状態がみられる。甕（45・46）は底のないミガキのある把手付きの大型と小型のもの。同じくミガキの胴部が丸く口縁が開く形の把手付きの甕（48）がある。大型の壺（47）は丸い胴部に口縁がくの字に外反する。器壁はもともと薄いが磨耗し、特に下半は内面の剥離が著しい。



SB3全景（土器出土状況）（西から）



SB3カマド土器出土状況（西から）



SB3全景（西から）



SB3カマド（西から）

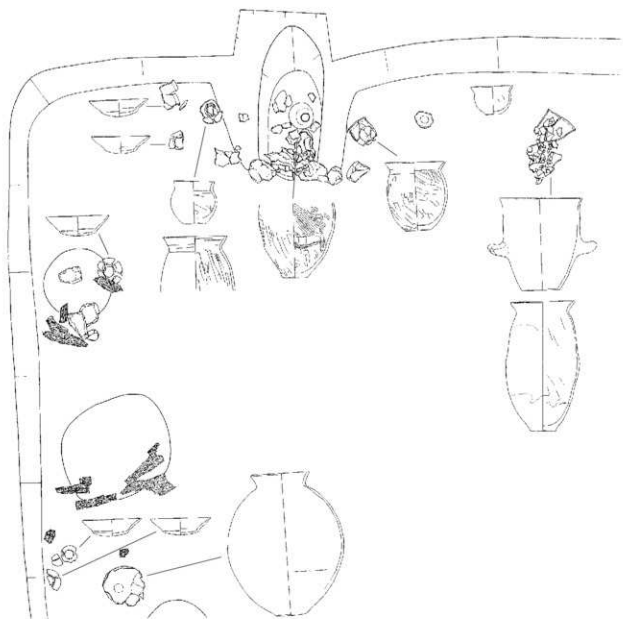


図13 SB3土器・炭化物出土状況図 (S=1:30、土器S=1:10)



SB3東壁土器出土状況(西から)



SB3北壁土器・炭化物出土状況(南から)

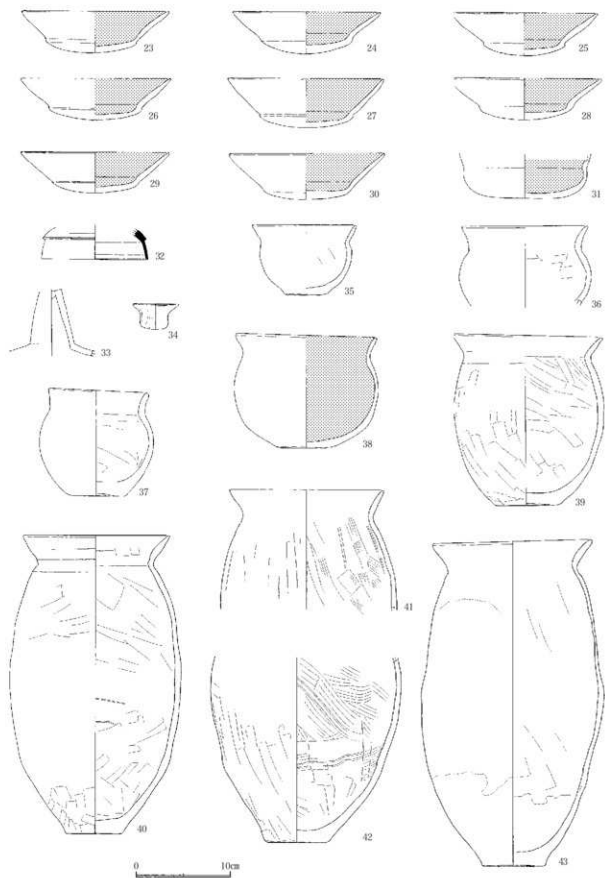


图14 SB3出土土器实测图 (S=1:4)

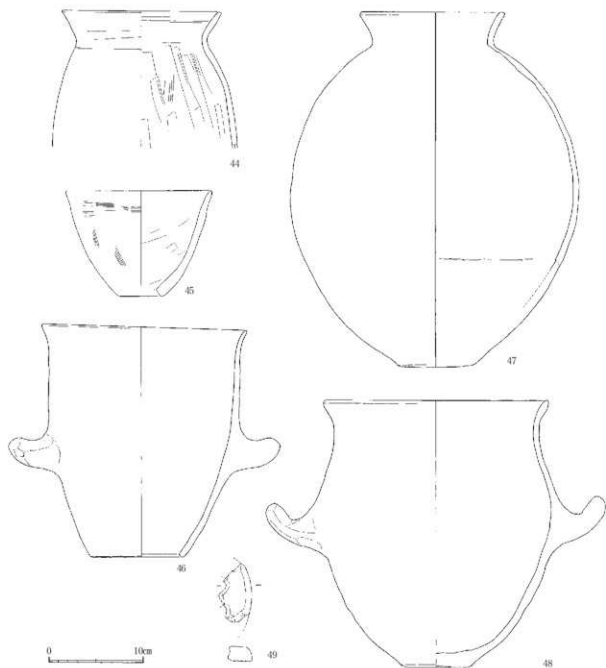


図15 SB3出土土器実測図 (S=1:4)

・SB4

調査区の北東、SB2と重複する。グリッドによる流路のレキ層の掘り下げにより検出されたもので、流路の中に位置しているために遺構全体が影響を受けている。遺構の東側1/3近くの範囲でSB2が重複しており、床面はSB2の床面との差はほとんどみられないくらいの高さであったが、遺構による床面への影響はみられなかった。



SB4全景 (南から)

北・東・南壁を井戸、土坑によって切られるが、このほかのところでは壁面の確認ができ、全体の規模を把握することができた。遺構は4.3×4.4mの平面形が隅丸方形である。

カマドは北壁の中央やや東よりに位置する。西側の端部分をS B 2掘り下げの際に上部を一部削ってしまっている。全体を把握できる状態であり、地山造り出しによるもので袖石はみられない。前面と焚口には焼土と硬化がみられ、煙道は先端部を土坑に切られるが住居壁面よりやや出る位の短いもので、焚口から急な角度で上がっている。

床面は、全体にレキが広がっている状態であった。床面は明確であったが、硬化面の検出はなかった。遺構内のピットはいくつかみられるが、明確な柱穴の検出はできなかった。

西壁周辺床面では、完形の土器が集中してみられた。床面土器の範囲についてはこの部分がS B 2と重複していないところであったために残っていたことが考えられ、本来はどのくらいの範囲にわたって置かれていたのかについては明らかではない。

出土土器は、壊がいずれも内黒処理されたもので、丸く小型の底部に口縁が開くもの(図17-50-52)と、ロクロ調整のもの(図17-53・54)がある。甕はミガキ(57)と内黒処理(58)、単孔の甌はハケ調整である。須恵器は、T K 10型式の坏が1点(56)。

実測個体は、ほぼ床面からの出土である。

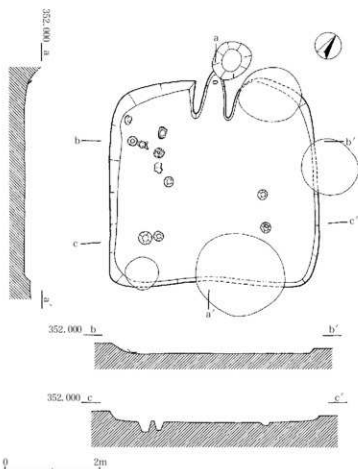


図16 S B 4実測図 (S=1:80)



S B 4カマド(南から)



S B 4土器出土状況(南西から)

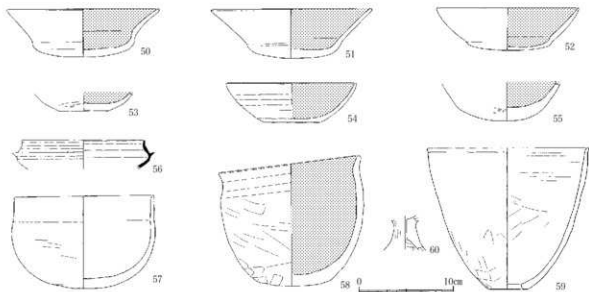


図17 SB 4出土土器実測図 (S=1:4)

・流路

調査区内を南北方向に流れる流路跡である。検出時からレキが露呈し、平安時代の井戸や土坑はこの面から掘り込まれていたが、古墳時代の住居などの遺構は流路によって上面がレキに覆われた状態で検出であり、遺構が大きく影響を受けた様子がみられた。このため、調査区東側にトレンチを設定し(図6)流路の確認を行った。

流路はトレンチ部分で幅210cm、レキの下層までの深さは約50cm、下に行くにつれて層が変わる位置を変換点とし、2段階に幅を縮小させている。トレンチ西側にみられる検出面から10cmほどまでが、古墳時代の遺構を覆っていた部分となる。

第1～3層に流路が入っており、第2層から鉄分の影響を受けている様子がみられる。第6層に含まれるレキは流路のものとは別のレキである。レキは、第1層では最大5cm前後であるが、第2層以下、10～15cmの大きさのものが多く入る。



流路確認トレンチ (南壁)

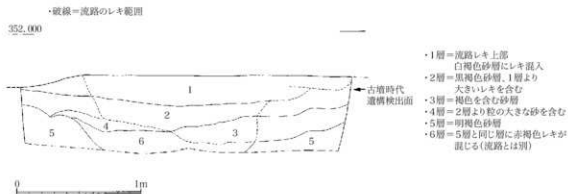


図18 流路断面図 (S=1:30)

・SK1

検出時、上面のレキ層を取りのぞいた面で頭部・足部の骨の一部が露出し始めた。これにより周囲の精査を行なったところ、楕円に近い楕丸長方形の土坑であることを確認した。

土坑は長さ2.0m、幅が0.75m。人骨は土坑の中央に伸展・仰向けの状態を検出した。頭部上面の顔の部分がレキの影響で取られるほかは、ほぼ全身がこの状態であった。このほか、足先部分も不明ではあるが、骨の残存から被葬者の身長は155cmほどと推測され、人骨鑑定(第四章)からは、壮年(20~39才)の男性との結果を得た。

遺構は、主軸はほぼ南北から45度東側に位置し、頭部が北東側を向く。頭部左上に底部回転糸切りの坏が一点(図19)と、右肩には、骨の下になる状態で鉄製品が出土した。出土位置から、いずれも被葬者と同時に埋納された副葬品と考えられる。鉄製品については、錆びと土に覆われていたため、現場では種別の判断がつかなかったが、保存処理(第四章)により刀子(図30)であることがわかった。

平安時代の土坑墓であるが、副葬品として刀子を持っていることは、この時代の土坑墓での副葬品をみるうえでの一例となる。



SK1人骨出土状況(西から)



SK1副葬品出土状況(南西から)

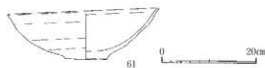


図19 SK1出土土器実測図(S=1:8)

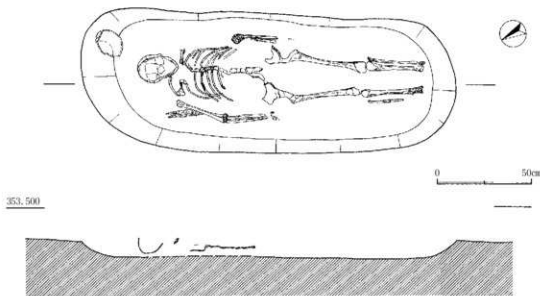


図20 SK1実測図(S=1:20)

・SK14

長辺が約260cm、短辺108cmの楕円形の土坑である。主軸は南北方向で、北端はカクランに当たっているため、正確な検出はできていない。

検出面からの掘り込みは残りの良い南部分で約12cmと全体的に浅い。床面はレキを多く含んだ軟弱な状態で不明瞭であったため、遺構北側を一部トレンチ状に掘り下げ、先に出土していた土器が接する面が床面であることを確認した。

遺構内からは、坏（図22）とニホンジカの骨が出土した。床面での遺物はこれのみであるが、ニホンジカの骨（第四章）は一部で、遺構の南側に位置し、北側にある土器とは離れた位置に置かれている。

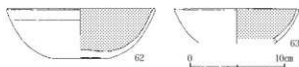


図22 SK14出土土器実測図 (S=1:4)

・SK15

長辺245cm、短辺130cmの不整形楕円形の土坑である。検出面からの深さは約18cm。覆土中からレキが多くみられ、床面も同じくレキを多く含み不明瞭であったため、一部を掘り下げた確認となった。

覆土中からはほぼ完形の坏（図24）が1点とほぼ床面の位置から獣骨が出土した。獣骨はウシ/ウマの四肢骨（第四章）である。

土坑内からは、土器（坏）と獣骨の一部が、離れた位置にあり、上記のSK14と同じ状態である。

SK14とは調査区内で離れた位置にあり、主軸の違いはあるが、時期がほぼ同じであり、性格は不明であるが、同じ意図を持った土坑であることが推測される。

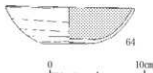


図24 SK15出土土器実測図 (S=1:4)

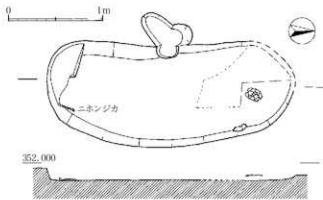


図21 SK14実測図 (S=1:40)



SK14全景（東から）

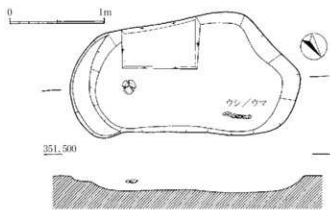
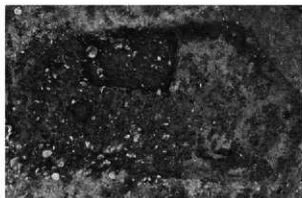


図23 SK15実測図 (S=1:40)



SK15全景（北東から）

・SK (井戸跡)

調査区北側に集中して位置する。いずれも流路のレキ層を掘り込んでつくられている。同じ時期の掘り込みはほかにもみられたが、井戸と確認したのは7基である。

いずれも円形で規模は径が170～190cmほど、深さは80cm強である。遺構を掘り下げ始め、早い所では20cmほどで水が湧きはじめ、ほかも大体半分の深さ（40cm）では完全に水が湧く状態であった。掘り込みはすり鉢状で、緩やかにではあるが2段掘りとなっている。素掘りで遺構に伴う材などはみられなかったが、SK 9の底からは大きなもので55cm、ほかにも5個あまりの河原石が入っていた。このほか、遺構からの遺物の出土は全くみられなかった。

井戸は、水が湧きやすい流路跡の範囲を選んできたものと推測される。

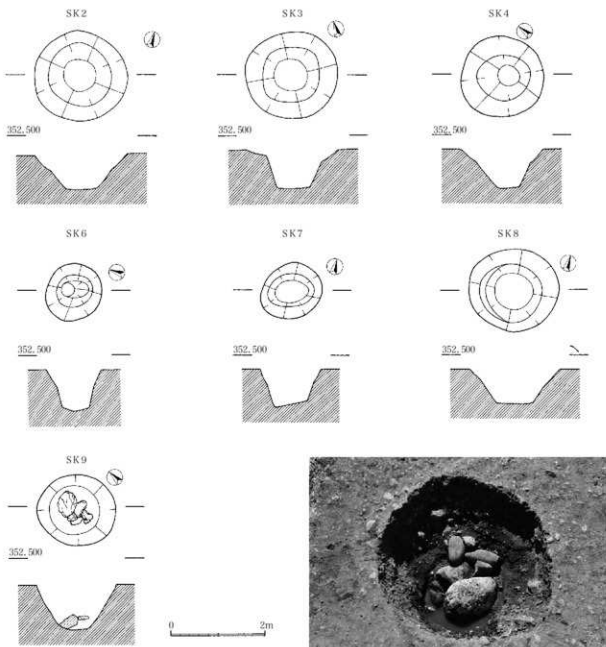
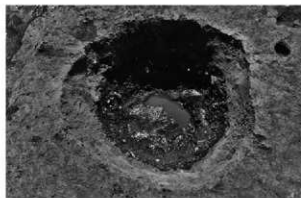
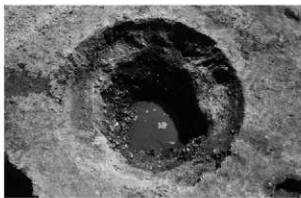


図25 SK 2～4、6～9実測図 (S=1:80)

SK 9全景



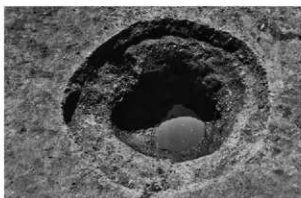
SK2全景



SK3全景



SK4全景



SK8全景

・SK19

レキ層の下、SK3とSD1に接して位置する。SK3が重複しているため、上面は取られているが平面は完形であった。

隅丸の方形で70×75cm、検出状況の良い西側で検出面からの掘り込みは35cmである。2段階に掘られており、2段目の上面で炭化材を検出した。炭化材は径18cmの円形、残存で長さ24cm。土坑の底部と炭化材の底部はほぼ同じ高さである。

遺物はほとんどなく、時期を判断するには至らなかったが、遺構検出が、レキ層の下からであったことから、平安時代のSK（井戸）よりは古く、古墳時代後期とみられるSD1を切ることから、この間の時期のものであると判断される。なお、周囲での同じ遺構の検出はみられなかった。

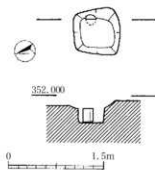


図26 SK19実測図 (S=1:60)



SK19断ち割り (南西から)



SK19炭化材 (西から)

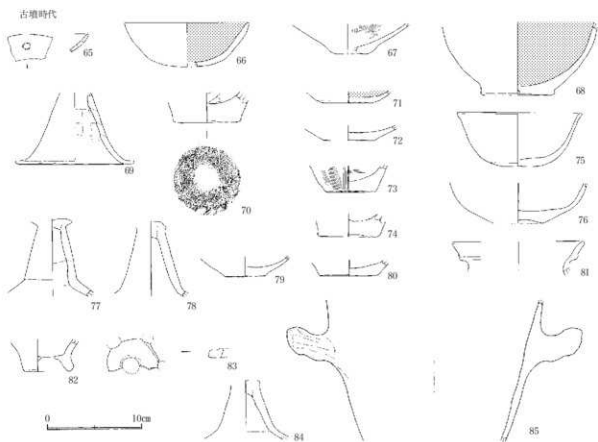


図27 その他遺構等出土土器（古墳時代）実測図（S=1:4）

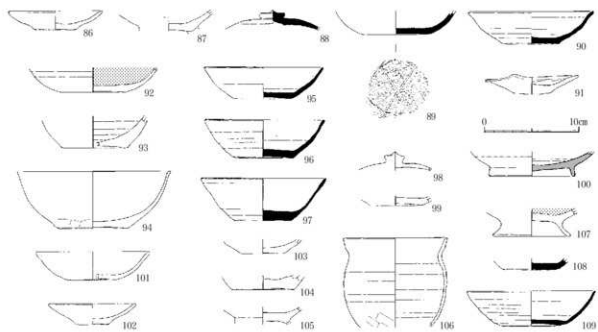


図28 その他遺構等出土土器（奈良・平安時代）実測図（S=1:4）

・出土土器

今回の調査で出土した土器の総量は約113.5kgである。土器は、古墳時代前期から平安時代、中世のものが出土している。この内の約半数は、古墳時代後期の住居跡からの出土である。次いで多かったのは検出面で古墳時代以降のものが占めている。

・古墳時代

住居跡からの出土の器種は、主に坏、高坏、甕（長胴、小型）、瓶である。前期は、器台（図11-13、図27-65）と壺（図27-81）である。

坏は各住居で出土し中心的な器種である。①半球形のもの、②半球形であるが、1よりも口縁が外を向き、底部が平らなもの、③半球形の小さな底部に、口縁部が大きく外反するものがみられ、そのほとんどが内黒処理されたものである。①、②はSB1（図9）、SB2（図11）に、③はSB3（図14）、SB4（図17）と分かれる。高坏は、坏部がわかるものはすべて内黒処理で、SB1（図9-5）では下部にわずかに稜線が残るが、他は稜のない丸い形となり、脚部は脚裾部が屈折するもの（SB2、3）とほかは中実で裾が広がるものとなる。このほかSB3からは、ホソ部（図14-34）が出土している。

甕は、長胴甕をはじめハケ調整がほとんどで、壺は小型のものはミガキ調整で頸部が長く（図11-21、22）、大型は丸い胴部にくの字に屈折する口縁と器壁が薄いハケ調整のもの（図15-47）。牛角状の把手を持ち、丸い胴部で口縁が外半するもの（図15-48）がある。瓶は把手を持ち、ややふくらんだ胴部に口縁がやや外反する底部のない大型のもの（図15-46）のと、小型では底部のないもの、単孔で内黒処理がされたものがあり、底部のない大型と小型は同じ住居（SB3）からの出土である。

須恵器は、SB3とSB4で各1点、図14-32（SB3）はTK47型式、図17-56（SB4）はTK10型式に比定される。遺構（住居跡）は、SB3、4がSB1、2よりも古く、SB3の5世紀末から、SB1の6世紀後半までの時期と考えられる。

・奈良・平安時代

本調査でのこの時期の遺物は、遺構出土はもとより全体的に少ない。

遺構（土坑墓・土坑）出土のものは底部回転糸切りの坏で、SK1出土（図19）は薄手で口縁が外側に開きややゆがんだ形で赤色を呈し、ほかは内黒処理されたものである。

須恵器坏は底部回転糸切で口径が13cm前後。底部に線刻「×」がみられる（図28-89）。土師器坏は遺構出土のものが口径15.5cmであるが、そのほかは、12cmと10cm弱の小型のものである。蓋は、宝珠つまみで須恵器（図28-88）と須恵器模倣（図28-98）がある。

灰釉陶器（高台付坏）（図28-100）は10世紀前半（大原2号窯様式）に相当するものである。

・中世

遺構外（検出面（SB2周辺）より風炉（遺物写真のみ）が1点出土している。残存部分での軸葉はみられない。この時代の明確な遺構は確認されていない。

表2 土器観察表

園	版 番号	時 期	種 別	器 種	残存部		調整・その他	出土遺構	
					部 位	量		遺構	位置
9	1	古墳時代後期	土師器	坏	全形	1	内黒	SB1	床直上
	2	古墳時代後期	土師器	坏	全形	1/3	内黒、黒斑	SB1	覆土
	3	古墳時代後期	土師器	坏	全形	1	ミガキ	SB1	床直上
	4	古墳時代後期	土師器	ミニチュア	胴部～底部	1/2	内黒、ナデ	SB1	床直上
	5	古墳時代後期	土師器	高坏	全形	1	内黒、ハケ・ミガキ	SB1	床直上
	6	古墳時代後期	土師器	高坏	杯～脚部	1/2	内黒、ミガキ	SB1	床直上
	7	古墳時代後期	土師器	甕	口縁～胴部	2/3	ナデ・ハケ粘土付着	SB1	床直上
	8	古墳時代後期	土師器	甕	胴部～底部	1/2	ハケ	SB1	カマド周辺
	9	古墳時代後期	土師器	壺	胴部	1/3	ナデ・ハケ円形浮文	SB1	覆土
11	10	古墳時代後期	土師器	坏	全形	5/6	内黒	SB2	床面
	11	古墳時代後期	土師器	坏	全形	1	内黒	SB2	覆土
	12	古墳時代後期	土師器	高坏	杯部	1	内黒	SB2	床面
	13	古墳時代後期	土師器	器台	台部	1/4	ナデ	SB2	覆土上層
	14	古墳時代後期	土師器	高坏	脚部	1/2	ミガキナデ	SB2	覆土上層
	15	古墳時代後期	土師器	瓶	全形	4/5	ハケ・ナデ底部：瓦痕	SB2	カマド
	16	古墳時代後期	土師器	長胴甕	口縁～胴部	1/3	ハケ、黒斑	SB2	カマド周辺
	17	古墳時代後期	土師器	長胴甕	全形	2/3	ハケ、黒斑	SB2	覆土
	18	古墳時代後期	土師器	甕	底部	1	ナデ	SB2	覆土
	19	古墳時代後期	土師器	甕	底部	1/4	底部：木葉痕	SB2	覆土上層
	20	古墳時代後期	土師器	甕	全形	4/5	ハケ	SB2	床面
14	21	古墳時代後期	土師器	甕	口縁～胴部	1/4	ミガキ	SB2	覆土上層
	22	古墳時代後期	土師器	甕	口縁～胴部	1	ミガキ	SB2	床面
	23	古墳時代後期	土師器	坏	全形	1	内黒	SB3	床面
	24	古墳時代後期	土師器	坏	全形	1/2	内黒	SB3	床面
	25	古墳時代後期	土師器	坏	全形	1/3	内黒	SB3	床面
	26	古墳時代後期	土師器	坏	全形	4/5	内黒	SB3	床面
	27	古墳時代後期	土師器	坏	全形	1	内黒	SB3	床面
	28	古墳時代後期	土師器	坏	全形	1/2	内黒	SB3	床面
	29	古墳時代後期	土師器	坏	全形	3/5	内黒	SB3	覆土
	30	古墳時代後期	土師器	坏	全形	2/3	内黒	SB3	床直上
	31	古墳時代後期	土師器	坏	胴部～底部	1	内黒	SB3	覆土
	32	古墳時代後期	須恵器	坏	口縁～胴部	1/5	ロクロ、自然釉	SB3	覆土
	33	古墳時代後期	土師器	高坏	脚部	1/2	ミガキ	SB3	覆土
	34	古墳時代後期	土師器	高坏	ホソ部	1		SB3	床直上
15	35	古墳時代後期	土師器	鉢	全形	4/5	ナデ	SB3	床面
	36	古墳時代後期	土師器	甕	口縁～胴部	1/2	ミガキ	SB3	床面
	37	古墳時代後期	土師器	甕	全形	1	ミガキ	SB3	床面
	38	古墳時代後期	土師器	鉢	全形	3/4	内黒	SB3	床面
	39	古墳時代後期	土師器	甕	全形	1	ナデ	SB3	床面
	40	古墳時代後期	土師器	長胴甕	全形	4/5	ナデ、黒斑	SB3	床面
	41	古墳時代後期	土師器	長胴甕	口縁～胴部	3/4	ナデ	SB3	床面
	42	古墳時代後期	土師器	長胴甕	胴部～底部	2/3	ケズリ、黒斑	SB3	床面
	43	古墳時代後期	土師器	長胴甕	全形	2/3	ナデ	SB3	床面
	44	古墳時代後期	土師器	長胴甕	口縁～胴部	2/3	ナデ	SB3	床面
	45	古墳時代後期	土師器	瓶	全形	1/4	内黒、ミガキ、黒斑	SB3	床面
	46	古墳時代後期	土師器	瓶	全形	4/5	ナデ・ミガキ	SB3	床面
17	47	古墳時代後期	土師器	壺	全形	2/3	ミガキ、黒斑	SB3	床面
	48	古墳時代後期	土師器	把手付甕	全形	1/2	ミガキ、黒斑	SB3	床面
	49	古墳時代後期	土師器	瓶	底部	1/3	ハケ・ミガキ	SB3	覆土
	50	古墳時代後期	土師器	坏	全形	1	内黒	SB4	床面
	51	古墳時代後期	土師器	坏	全形	4/5	内黒	SB4	床面
	52	古墳時代後期	土師器	坏	全形	1	内黒	SB4	床面
	53	古墳時代後期	土師器	坏	底部	4/5	内黒	SB4	覆土
	54	古墳時代後期	土師器	坏	全形	1/3	内黒	SB4	覆土

園版	園番号	時期	種別	器種	残存部		調整・その他	出土遺構	
					部位	量		遺構	位置
17	55	古墳時代後期	土師器	鉢	底部	1	内黒	SB4	床面
	56	古墳時代後期	須恵器	坏	口縁～胴部	1/5		SB4	床面
	57	古墳時代後期	土師器	鉢	全形	1	ミガキ	SB4	床面
	58	古墳時代後期	土師器	甕	全形	1	内黒	SB4	覆土上層
	59	古墳時代後期	土師器	瓶	全形	4/5	ナデ、黒斑	SB4	床面
19	60	古墳時代後期	土師器	器台	脚部	1/2	ナデ	SB4	覆土上層
	61	平安時代	土師器	坏	全形	4/5	回転系切り	SK1	覆土
22	62	平安時代	土師器	坏	全形	1/2	回転系切り	SK14	床直上
	63	平安時代	土師器	坏	口縁～胴部	1/2		SK14	床直上
24	64	平安時代	土師器	坏	全形	1	内黒	SK15	覆土
27	65	古墳時代前期	土師器	器台	受部	1/3	ミガキ	SK2	覆土
	66	古墳時代後期	土師器	坏	全形	1/2	内黒	SK11	覆土
	67	古墳時代前期	土師器	壺	底部	1/2	ハケ、黒斑	SK22	覆土
	68	古墳時代	土師器	鉢	胴部～底部	1	内黒、黒斑	SK32	覆土
	69	古墳時代	土師器	高坏	脚部	2/3	ミガキ、黒斑	SK32	覆土
	70	古墳時代	土師器	甕	底部	1	底：木葉痕		トレンチ
	71	古墳時代	土師器	坏	底部	1	内黒		グリッド
	72	古墳時代	土師器	坏	底部	1	内黒		グリッド
	73	古墳時代	土師器	甕	底部	1	ハケ、黒斑		グリッド
	74	古墳時代	土師器	甕	底部	1	ナデ		グリッド
28	75	古墳時代	土師器	杯	全形	1/2	ミガキ、黒斑		グリッド
	76	古墳時代	土師器	鉢	胴部～底部	1/3	(摩耗)		グリッド
	77	古墳時代	土師器	高坏	脚部	1/2	ミガキ		検出面
	78	古墳時代	土師器	高坏	脚部	1/2	ハケ?		検出面
	79	古墳時代	土師器	坏	底部	1	ハケ・ミガキ?		検出面
	80	古墳時代	土師器	甕	底部	1	ナデ		検出面
	81	古墳時代前期	土師器	壺	口縁部	1/5	ナデ		検出面
	82	古墳時代	土師器	甕	底部	1	ナデ、黒斑、底部穿孔		検出面
	83	古墳時代	土師器	瓶	底部	1/2	底部多孔		検出面
	84	古墳時代	土師器	高坏	脚部	1/2	ミガキ		カクラン
85	古墳時代	土師器	把手付甕・瓶	胴部	1	ミガキ		カクラン	
28	86	平安時代	土師器	皿	全形	1/3	回転系切り	SK3	覆土
	87	平安時代	土師器	高台付坏	底部	1	回転系切→ナデ	SK5	覆土
	88	平安時代	須恵器	蓋	天井部	1	ナデ	SK8	覆土
	89	平安時代	須恵器	坏	底部	1	回転系切り・底部線刻	SK12	覆土
	90	平安時代	須恵器	坏	全形	1/2	回転系切り	SD2	覆土
	91	平安時代	土師器	カワラケ	全形	1/3	回転系切り	Pit3	覆土
	92	平安時代	土師器	杯	底部	2/3	回転系切→ナデ		グリッド
	93	奈良時代	土師器	甕	底部	1/2	ナデ、黒斑		グリッド
	94	平安時代	土師器	坏	全形	2/3	回転系切→ナデ		グリッド
	95	平安時代	須恵器	坏	全形	1/3	回転系切り		グリッド
	96	平安時代	須恵器	坏	全形	4/5	回転系切り・底部線刻		グリッド
	97	平安時代	須恵器	坏	全形	1/4	回転系切り		グリッド
	98	平安時代	土師器	蓋	天井部	1/2	ナデ		トレンチ
	99	平安時代	須恵器	坏	底部	1	回転系切り		トレンチ
100	平安時代	灰釉葉陶器	高台付坏	底部	1/4	回転系切り		トレンチ	
101	平安時代	土師器	坏	全形	1/3	回転系切り		検出面	
102	平安時代	土師器	皿	全形	1	回転系切り		検出面	
103	平安時代	土師器	坏	底部	2/3	回転系切り		検出面	
104	奈良時代	土師器	甕	底部	1/2	ハケ		検出面	
105	平安時代	土師器	高台付坏	底部	1	ハケ		検出面	
106	平安時代	土師器	甕	口縁～胴部	1/3	ハケ		検出面	
107	平安時代	土師器	高台付坏	底部	1/4	内黒、回転系切り		検出面	
108	平安時代	須恵器	坏	底部	1	回転系切り		検出面	
109	平安時代	須恵器	坏	全形	2/3	回転系切り		検出面	

3 その他遺物

1：石製品

砥石が2点、小型のもので、いずれも検出面などの遺構以外からの出土である。

図29-1は角の丸い長方形で、上部に一箇所穿孔がされている。側面は4面とも磨かれている。平面には、はっきりとはしないが、縦方向に研磨した痕が残る。ほぼ完形であるが、検出後から部分的に剥離しはじめ、全体的に脆い。

図29-2は、残存量は全体の約半分。長方形で長辺がくびれた形をしている。長辺の4面の内、面の狭い側面は研磨により中央がへこみ、くびれた形になる。広い面の両面に研磨痕がみられる。

2：鉄製品

刀子1点。SK1土坑墓の副葬品である。全体がサビに覆われているため目視での確認はできないが、完形で全長20.5cm、身部が2.2cm、基部は8.3cmとなる。基部は断面方形である。

また、基部には鉄製品がもう一個体、サビにより付着している。長さ6cm、幅が6mmほどの方形のものであるが、完形か破損したものかについても不明である。

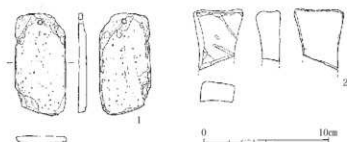


図29 石製品実測図 (S=1:3)

このほかに、鉄の小片や、遺構内に持ち込まれたとみられる河原石がみられる。

獣骨は数点検出されたが、一部や破片である。ニホンジカ・ウマ/ウシが土坑内から出土し(第四章)、このほかにも、検出面などの遺構外から小片が出土している。

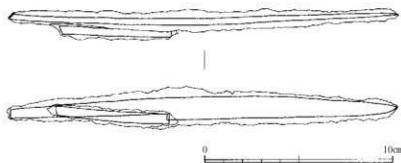


図30 鉄製品実測図 (S=1:2)

表3 その他遺物観察表

図	番号	時期	種別	名称	残存量	重量(g)	形態等	出土遺構	
								遺構	位置
29	1	平安時代	石製品	砥石	完	40.0	上部穿孔1		グリッド
	2	平安時代	石製品	砥石	1/2	46.5	中央が窪む		検出面
30		平安時代	鉄製品	刀子	完		柄に別個体の鉄製品(棒状)が付着	SK1	覆土

IV 平林東沖遺跡出土骨鑑定および金属遺物保存処理

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

I. 出土骨の同定	<表・図版一覧>
引用文献	表1. 骨同定結果
II. 金属遺物保存処理	表2. 出土人骨歯牙計測値
	図版1 出土骨
	図版2 SK1金属遺物出土状況
	図版3 保存処理前・処理後状況およびX線透過画像

はじめに

平林東沖遺跡(長野県長野市平林)は、浅川扇状地上に立地する平安時代の集落である。今回の発掘調査では、当該期の竪穴建物跡のほか、墓坑等が検出されている。

本報告では、墓坑(SK1)よりほぼ全身の骨格が確認された人骨が出土したことから、埋葬者に関する情報を得るために骨同定を実施した。この他の土坑より出土した獣骨とみられる骨片についても種類・部位を明らかにした。さらに、上記したSK1からは埋葬品とみられる金属遺物が出土したため、保存処理も合わせて実施した。

I. 出土骨の同定

1. 試料

鑑定の対象とした人骨および獣骨が出土した遺構は、SK1、SK14、D地区SK15である。SK1からは、埋葬人骨が出土しており、左上腕骨等を除く部位が確認できる。出土骨の保存状態は極めて脆弱で、緻密質が薄い箇所はかろうじて形を残す程度、あるいは分解が進み失われている。そのため、鑑定対象とする試料については主要部位別に土壌ブロックとして計11点(Na1~11、Na5は後述する金属遺物に相当する)を取り上げた。

またSK14とD地区SK15は、発掘調査時に取上げられた骨片である。SK14より出土した骨(Na3)は、クリーニングされた状態にあり、一方のD地区SK15は土壌とともに取上げられている。

2. 分析方法

土壌ブロックとして取上げたSK1の試料に関しては、可能な限り骨を取り上げることを試みたが、困難と判断される場合は土塊のまま観察を行っている。また、Na9の左腕骨・尺骨部は、土壌を除去する際に崩壊して破片となった。また、D地区SK15も保存状態が極めて悪いことから、土塊の状態を観察を行っている。

これらの出土骨については自然乾燥させた後、一般工作用接着剤を用いて可能な限り復元を試みる。試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。なお、人骨歯牙の計測方法については藤田(1949)に基づく。

表1. 骨同定結果

地点	取上 番号	種類	部位	左右	状態	数量	備考
S K 1	No.1	ヒト	脛骨	右	遠位端欠	1 +	
				右	遠位端部片	3	土塊状
			腓骨	右	破片	25 +	土塊状含む
			足根骨	右	破片	1 +	土塊状
	No.2	ヒト	大腿骨	右	近位端部片	1	土塊状
				右	両端欠	1	
				右	遠位端部片	1	土塊状
				右	破片	54 +	土塊状含む
	No.3	ヒト	橈骨・尺骨	右	破片	1 +	土塊状
				右	破片	41 +	土塊状含む
	No.4	ヒト	上腕骨	右	近位端部片	1	土塊状
				右	両端欠	1	
				右	遠位端部片	1	土塊状
				右	破片	31 +	土塊状含む
	No.6	ヒト	鎖骨	右	破片	1	
			肩甲骨	右	破片	2	土塊状
	No.7	ヒト	頭蓋		破損	1	土塊状
			脳頭蓋		破片	29	
			下顎骨	右	破片	1	M 2、M 3 植立
			上顎第 1 小臼歯	左	ほぼ完存	1	
			下顎第 1 大臼歯	左	破片	1	
	No.8	ヒト	鎖骨・肩甲骨	左			土塊状
			橈骨・尺骨	左	破片	26 +	土塊状含む
	No.9	ヒト	橈骨・尺骨	左	破片	26 +	土塊状含む
	No.10	ヒト	大腿骨	左	近位端部片	4 +	土塊状
				左	両端欠	1	
				左	破片	10	土塊状含む
左				遠位端	1 +	土塊状	
左				遠位端部片	26 +	土塊状含む	
左				遠位端部片	1		
No.11	ヒト	脛骨	左	両端欠	1		
			左	遠位端部片	1	土塊状	
		腓骨	左	近位端部片	1		
			左	両端欠	1		
			左	遠位端部片	1		
			左	破片	38 +	土塊状含む	
S K 14	No.3	ニホンジカ	第 3 中手骨	左	遠位端欠	1	第 2・4 中手骨未化骨
D 地区 S K 15	覆土	ウマ/ウシ	四肢骨		遠位端	15	土塊状

M : 大臼歯

表 2. 出土人骨歯計測値

	部位	左右	歯冠幅	歯冠厚
上顎歯牙	第 1 小臼歯	左	6.74	8.42
下顎歯牙	第 1 大臼歯	左	11.39	11.47
	第 2 大臼歯	右	11.35	11.04
	第 3 大臼歯	右	10.13	9.63

3. 結果

同定結果を表1に示す。以下、遺構毎の結果を記す。

(1) SK1

SK1試料は人骨である。No1が右脛骨と右腓骨および足根骨と思われる破片、No2が右大腿骨、No3が右橈骨・尺骨、No4が右上腕骨、No6が右鎖骨および右肩甲骨、No7が頭蓋・左上顎第1小臼歯・右下顎骨・左下顎第1大臼歯、No8が左鎖骨・肩甲骨、No9が左橈骨・尺骨、No10が左大腿骨、No11が左脛骨と左腓骨である。No7の右下顎骨では、第2大臼歯・第3大臼歯が傾立する。歯牙計測値を表2に示す。

(2) SK14

SK14のNo3は、ニホンジカの左第3中手骨である。遠位端が欠損し、近位端部も破損する。第2・4中手骨は未化骨で外れる。

(3) D地区SK15

D地区SK15は、土塊状の試料であり、保存状態が悪い。ウマ/ウシの四肢骨である。

4. 考察

SK1より出土した人骨は、頭蓋を北側に向け、伸展された状態で埋葬された土葬骨である。頭蓋は、前頭骨、顔面頭蓋が破壊されるが、後代の攪乱で削平されたことによるとみられる。人骨は全体的な形状を留めているものの、保存状態が悪く、取上げの際に破片となる等脆弱である。とくに緻密質が薄い、椎骨、肋骨、寛骨などは形が残るものの脆弱で取り上げることが不可能であった。また、四肢骨等も骨端部が分解・消失する。性別を判断するため外後頭骨隆起および内後頭骨隆起の確認を試みたが、上記のような状況から土壌の除去は困難であった。今回の鑑定によって確認することができた部位のうち、歯牙の計測値から推定すると(権田, 1959)、本人骨は男性の可能性がある。年齢は、第3大臼歯が萌出済みであることから成人に達していたとみられ、歯牙の咬耗状況から壮年(20~39歳程度)の可能性がある。

SK14のNo3は、ニホンジカの左第3中手骨である。第2・4中手骨は未化骨で外れていることから、比較的若い個体とみられる。D地区SK15では、ウマ/ウシの四肢骨である。大腿骨および脛骨の可能性もあるが詳細不明である。ニホンジカは食用として、ウマ/ウシは家畜等として利用されていた可能性がある。

引用文献 藤田恒太郎, 1949, 歯の計測基準について, 人類学雑誌, 61, 27-32.

権田和良, 1959, 歯の大きさの性差について, 人類学雑誌, 67, 151-163.

図版1 出土骨



1. ヒト頭蓋 (SK1:No7) (a: 上面観, b: 右側面観, c: 頭頂部)
 2. ヒト右下顎骨 (SK1:No7) 3. ヒト右鎖骨 (SK1:No6) 4. ヒト右肩甲骨 (SK1:No6)
 5. ヒト右上腕骨 (SK1:No4) 6. ヒト右橈骨・尺骨 (SK1:No3) 7. ヒト左大腿骨 (SK1:No10)
 8. ヒト左大腿骨遠位端部片 (SK1:No10) 9. ヒト左脛骨 (SK1:No11)
 10. ヒト左脛骨遠位端部片 (SK1:No11) 11. ヒト左腓骨 (SK1:No11)
 12. ヒト右大腿骨 (SK1:No2) 13. ヒト右大腿骨遠位端部片 (SK1:No2)
 14. ヒト右脛骨 (SK1:No1) 15. ニホンジカ左第3中手骨 (SK14:No3)
 16. ウマ/ウシ大腿骨(D地区 SK15:覆土) 17. ウマ/ウシ脛骨(D地区 SK15:覆土)

II. 金属遺物保存処理

1. 試料

保存処理の対象とされた金属遺物は、SK1より出土した埋葬人骨の右上腕骨付近より出土した刀子様の遺物1点（SK1 Na5）である。当遺物の出土状況を図版2に示す。

2. 保存処理方法

以下に、保存処理工程を記す。

1) 事前記録（写真撮影）

2) X線透過撮影

（株）理学電機製 RF-250 X-RAYを使用（撮影条件：160Kvp, 5mA, 20sec, 1m）

3) 脱塩処理

セスキ炭酸ナトリウム水溶液（0.5%）浸漬

脱塩処理後に蒸留水の浸漬・洗浄による脱アルカリ処理

4) 錆落とし（クリーニング）

ミニグラインダー、エアープラシ等を使用

5) 合成樹脂による強化処理

アクリル樹脂プライマルMV-1水溶液（33%）を減圧含浸および塗布

6) 乾燥（脱水処理）

7) 接合

エポキシ系接着剤を使用

8) 事後記録（写真撮影）

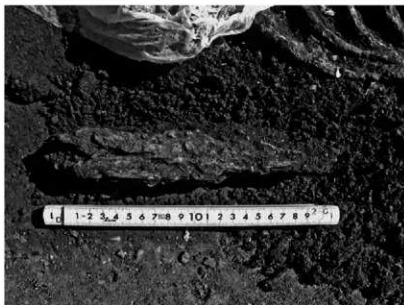
3. 結果

2. の工程を経て、金属遺物の保存処理を完了した。保存処理後の状況を図版3-3に示す。なお、SK1の埋葬人骨の副葬品とみられる刀子様の金属遺物は、X線透過撮影の結果、刀子様の金属遺物本体とこれとは別の個体とみられる遺物が確認された（図3-2）。この別個体と考えられる遺物は、1cm角に満たない棒状を呈しており、錆等の進行により本体と癒着する。この金属遺物の取り扱いは、担当者との協議に基づき、周囲の土砂の除去により癒着する状況が確認できる程度に留めている。

4. 金属遺物の取扱いについて

- （1）保存処理を行った金属遺物については、常に湿度や脱酸素状態の確認などの管理を行ってください。
- （2）樹脂含浸等により強化処理を施していますが、衝撃等により破損する恐れがあります。遺物の移動時などはとくに取り扱いに注意してください。

図版2 SK1金属遺物出土状況



図版3 保存処理前・処理後状況および透過X線画像



V 平林東沖遺跡の考察

1 遺構の展開

平林東沖遺跡で検出した遺構は、古墳時代前期、中期、後期、奈良・平安時代のものである。時代ごとの遺構に特徴がみられ、各時代の主な遺構は以下のとおりである。

- ・古墳時代前期 = 土坑（井戸）：土坑の中に器台・小型埴・二重口緑壺が多く入れられたもの。井戸は廃棄後に土器を入れたものである。
- ・古墳時代中期 = 竪穴住居：住居の多くはこの時期のもので、集落が展開した時期である。調査範囲の北西側・後期に多くみられ、南東では数を減らしている。特に後期のものでは、カマド周辺を中心に土器や炭化材が置かれている。
- ・平安時代 = 掘立柱建物、土坑（土坑墓・井戸など）：竪穴住居はわずかで、掘立柱建物が3棟みられる。この時期は土坑・溝が多くみられ、土坑墓をはじめ、獣骨（ウマ・ウシ）や土器を埋納したものがある。このほか井戸が多く造られる。

遺跡は古墳時代から、前期では住居跡はみられないが、土坑では土器が器台などを意図的に埋納されていることから、生活域とは別の場とされていたことが考えられる。次の中・後期では、明確な集落が展開する。位置は北側に集中し南端では造られなくなる。これに対して、平安時代になると住居は一気に数を減らし、集落としては捉えられなくなる。古墳時代までは居住域であったが、次に遺構がみられる平安時代では集落はなくなっている。この土地利用の変化の要因として考えられるのが河川である。河川に伴うレキ層は、C・D区にて確認され、いずれも古墳時代の住居跡がその影響を受けている。平安時代の井戸は、いずれも素掘で1m余りの深さであることから、水が湧きやすく井戸に適した場所になったことが考えられる。近い位置に複数つくられており、集団での利用がうかがわれる。

遺跡の立地は、浅川扇状地と裾花川扇状地の裾合谷の近くで、地理的にも古代までの多くの遺跡が分布する場所とは様相を異にし、一帯に条里が残るとみられる場所に位置している。条里遺構については、調査での確認はなかったが、これと同じ時期の遺物として獣骨が特筆される。いずれも部分的なものであるが、ウシの骨を使ったト骨や土坑や溝に埋納されたウマ・ウシの下顎がみられる。獣骨は土坑墓の副葬品にニホンシカの角が使われているが、特にウマ・ウシは埋納された骨には手が増えられており、何らかの理由により意図的に解体が行われ、その上で埋納した事が考えられる。骨を使った祭祀（ト骨）があることから、条里制による農耕、それにウマ・ウシ（飼育）が同じ時期に存在していたことが考えられる。

土器は、遺構に伴うもののほかに、特に平安時代で検出面などの遺構外からの出土がみられ、その中には灰釉・緑釉陶器をはじめ、文字線刻のある小型壺などがみられる。また少数でないことから、この時期の遺跡のありかたについて、このような遺物が伴う遺構の存在が遺跡内または周辺にあることが考慮される。

このように遺構からみた遺跡と土地利用の可能性を、以下のようにまとめる。

- ・古墳時代：集落（前期＝周辺に集落がある可能性）・中・後期＝集落（中心から、南側の縁辺部）
～河川～
- ・平安時代：集落外（居住域の移動）→掘立柱建物・緑釉陶器など（文字資料）
条里・農耕→ウマ・ウシの飼育（農耕に伴う祭祀）、井戸・土坑墓（墓域）

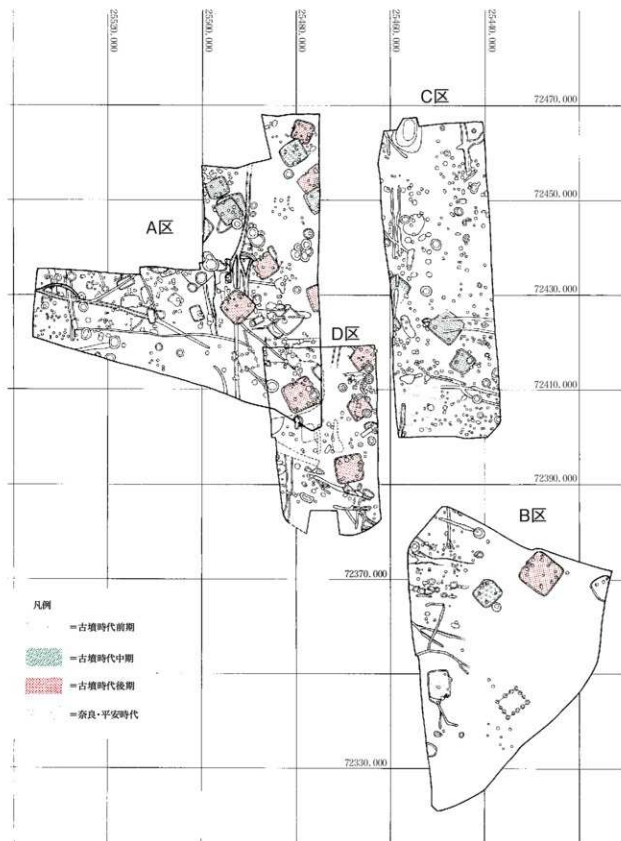


图31 調査区 (A~D区) 全体図 (S=1:800)

2 住居跡出土古墳時代後期土器について

平林東沖遺跡では、住居跡が多く存在するのは古墳時代中・後期である。特に後期は床面やその付近に土器が置かれることから出土状況が良好であった。この中で、一括して出土した、D区SB3(図32-1~21)、SB4(23~27)、A区SB16(28~59)、を挙げ、本遺跡での位置付けについて考える。

・ 坏(1~9、23~25、28~47) 器種構成の中心となるもので、以下のように分類する。

I類：底が丸く、底部と胴部が一体化し、口縁が外側に大きく開く

- a：底が丸いもの(1~8、23~25、28~31、34~36、40~42)

- b：aよりも底部が平坦になるもの(32、33、37~39)

II類：丸い底部でaよりも胴部が高くなり、口縁が上にのびる

- a：大(胴部最大径13.1cm、胴部高3.1cm)(9)

- b：小(胴部最大径10.5cm前後、胴部高2.2cm)(46、47)

III類：半球形で、口縁は上を向く(43~45)

D区SB3はI類-aを主体にII類-aが1点、すべて内黒処理がされる。大きさは、口径15.5cm前後が多く、最大16.5cm、器高は4.5cm前後が多く、最大5.2cm、胴部から底部までは最小で0.8cm~1.3cm前後である。

SB4も内黒処理のI類-aで口径15.0~17.0cm、器高4.5~5.2cm、胴部から底部までは0.9cmと1.5cmである。

A区SB16はI~III類があり、I類-aのうち4点が内黒処理で、ほかの住居よりも割合を減らす。I類-aが口径15.0~17.0cm、器高は4.3~4.9cm、胴部から底部までは0.8~1.2と1.6~2.0cmの2種類がみられ、I類-bで口径16.0cmを中心に15.0~17.2cm、器高は3.8cmと4.4cm、胴部から底部までは0.8~1.2cmとなる。II類-bが2点あり、この内1点は内黒処理のもので、III類は3点である。

I類-aは、D区SB3例では、器種・大きさそれぞれに内黒処理と、すべてが同じ規格であるが、A区SB16例では、内黒処理の有無と大きさにばらつきがみられ、特に42はほかより小さく、40は大きい。なお、I類-bはI類-aの後出で、粗雑化していったものにとらえられる。

・ 須恵器(10、27、48)

D区SB4例(27)の坏は、TK10段階で、出土位置は坏と同じ床面であることから遺構の時期を示し、A区SB16(48)はTK43段階と後出する。なお、D区SB3例(10)はTK47段階であるが、出土位置は覆土中(下層)である。

このほかの器種でのA区SB16とD区SB3の比較では、共通する長胴甕(19、20、56)・壺(21、57~59)は、SB16では口縁が上に立ち上がるのに対し、SB3は胴部が長く底部が平らであるが、胴部に丸みを残し、口径よりも胴部最大径(胴部中央)が大きく、口縁がくの字に外反する。

以上から、D区SB3→SB4→A区SB16の変遷がみられる。時期は、A区SB16を6世紀後半初頭に、D区SB4を6世紀中葉、SB3を5世紀末~6世紀初頭と考える。北信地域では、D区SB3が覆田Ⅲ期、屋代編年古墳6期、長野市内では本村東沖遺跡6段階に後続。D区SB4が覆田Ⅳ期・屋代編年古墳7期後半に、A区SB16が覆田Ⅳ期新相・屋代編年8期前半に位置する。

A区SB16、D区SB4は、須恵器の供伴が確定であること、D区SB3については土師器の比較からSB4・SB16の前段階とし、その上限として須恵器の年代を考慮するものである。平林東沖遺跡の集落は、古墳時代中期からこの時期を中心に展開し、A区SB16段階から終息していく。

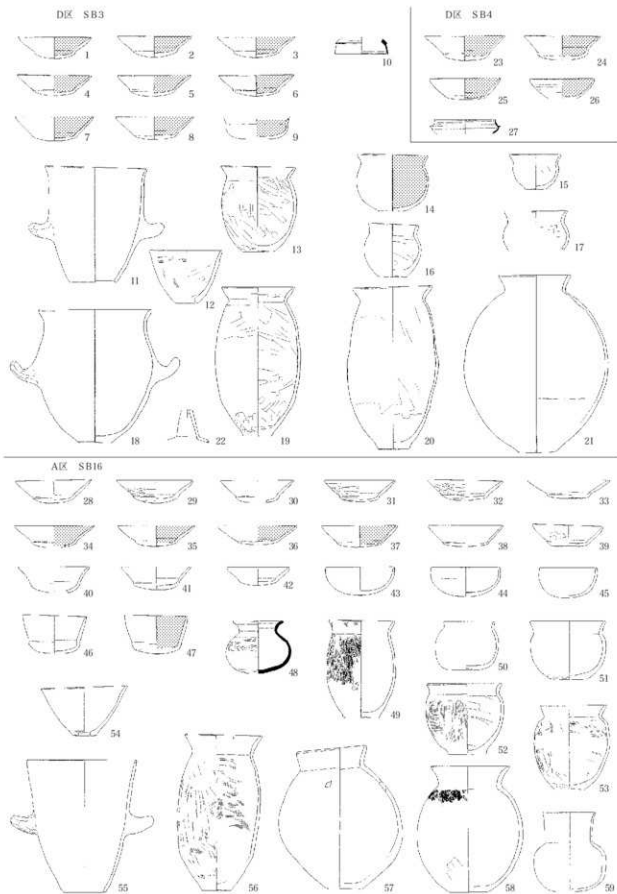


图32 古墳時代住居出土土器 (S=1:16)

VI まとめ

本調査では、約960㎡の調査区のうち、以前の調査区との重複分と排水溝による乱乱部分を除いた範囲での調査を行い、遺構は古墳時代後期から平安時代を、遺物では古墳時代前期から中世までのものを確認した。

遺構は、古墳後期の住居跡を4軒検出した。この内2軒は重複していたが、カマドはそれぞれ残っており、造り出しの袖を持つものと、一部を検出することができなかったが、構築の粘土が天井部まで残っていたものがみられた。また、ほかの3軒よりもやや離れて位置する住居（S B 3）は、検出面からの掘り込みが深く、ほかの遺構との重複がない良好な検出状況であり、床面付近から床面にかけて土器や炭化材が検出された。土器はカマド内部と周辺、また2辺の壁際に多くみられるものである。炭化材は、検出量と、同じ位置にある土器と住居に伴う土坑・ピットとの位置から、住居廃棄時から廃棄後のものと考えられ、焼失住居ではない。住居床面での土器の出土が多いのはS B 3であるが、その他の住居でも、床面に完形かそれに近い状態の土器が数点みられ、同時期のものが、同じ状況での住居廃棄を行っていたことがうかがわれる。

次に遺構がみられるのは平安時代であるが、住居跡の検出はなかった。一番多いのは土坑であり、この内7基が井戸である。直径170～190cmの円形で、深さは80cmほどの素堀のもので、掘り始めて30cmほどから水が湧き始めた。調査区では、重機による表土除去時から水が湧き、土坑や掘り込みが深かったS B 3では常に水がついている状態であった。このほか、土坑墓が1基、頭部を北寄りの北東方向に向けた位置で検出された。1体分の人骨が残り、土師器坏1点と刀子が1点副葬されているものである。

調査区内の北側から東に向かって、検出時よりレキ層がみられこの範囲での河川の流路跡が確認された。この流路とその周辺では検出面はレキを含んだ状態であったが、流路が及んでいない調査区南側では、レキを含まない検出面であった。平安時代の井戸はこの範囲に集まっており、レキを掘り込んで造られている。これに対して、古墳時代の遺構は、このレキを10cmほど掘り下げた検出であり、住居跡を含めそのほとんどがレキの影響を受けていた。

今回検出された河川（流路）が流れていたのは、古墳時代後期以降から平安時代にかけての時期と考えられる。本調査区で遺構が古墳時代後期と平安時代と時期を隔てているのは、この間に河川があったことによるものであり、集落（住居跡から井戸・土坑（土坑墓）などへと土地利用にも変化がみられたのは、この影響によることがうかがわれる。

遺物では、獣骨が出土しており、一部および破片であるが、土坑（平安時代）で土器と獣骨（一部）が検出されたものが2基あり、骨はウシ/ウマ、ニホンジカである。この他にも検出面など遺構外からも出土している。

土器は、遺構のみみられる古墳時代後期・平安時代のほか、遺構外で古墳時代前期などがみられる。これらの時期は周辺の前回調査区で遺構が確認されているものであるが、このほかに風炉（破片）（遺物写真のみ掲載）が遺構外から出土している。今のところ明確な中世の遺構は確認されていないが、近くに平林城跡があることをなどが考慮される。

平林東沖遺跡では、平安時代以降、集落の展開は見られなくなる。遺構は土坑（井戸・土坑墓）を中心に溝などで、遺構の性格が不明なのに対して遺物が多くみられる。ウマ・ウシをはじめとした獣骨が多いのも特徴であり、立地では、集落に適さないと見られる一方、平安時代からの条里の範囲内と考えられる。明確な集落である古墳時代と、水田との関係がうかがわれ遺構としての性格が明確ではない平安時代、これに加え、遺構の存在は不明であるが遺跡等の存在が考慮される中世と、時代により遺跡の性格が大きく変化していることが考えられる。

遺物写真1





番号=実測団番号に対応



図 29-2

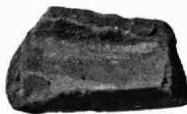


図 29-1



刀子

図 30



風炉 (写真のみ)

報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん ひらばやしひがしおきいせき
書名	浅川扇状地遺跡群 平林東沖遺跡（2）
副書名	（仮称）Family Mart 長野平林店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第138集
編著者名	遠藤恵実子
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL：026-284-0004 FAX：026-284-0106
発行年月日	2014（平成26）年12月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査 起因
		市町村	遺跡番号					
平林東沖 遺跡	長野県長野市平 林1丁目1038番2	20201	B-023	36° 39′ 9″	138° 12′ 54″	2014.8.26 ～ 2014.10.25	960㎡	店舗 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平林東沖遺跡	集落	古墳時代	後期	堅穴住居	4	土師器・須恵器		
		奈良・平安時代		土坑墓	1	土師器・須恵器 刀子・砥石 (獣骨)		土坑墓副葬品 (坏・刀子)
要約	浅川扇状地の扇端部に位置する、集落遺跡。古墳時代後期の住居跡は検出時は流路のレキに覆われていた。このレキ層の上面からは、平安時代の井戸が掘り込まれており、古墳時代後期から平安時代の間に流れ込んだものとみられる。流路の影響により土地利用が変化したことが考えられる。							

長野市の埋蔵文化財第138集

浅川扇状地遺跡群

平林東沖遺跡（2）

平成26年12月25日 発行

発行 長野市教育委員会
編集 文化財課 埋蔵文化財センター
印刷 ほおずき書籍株式会社